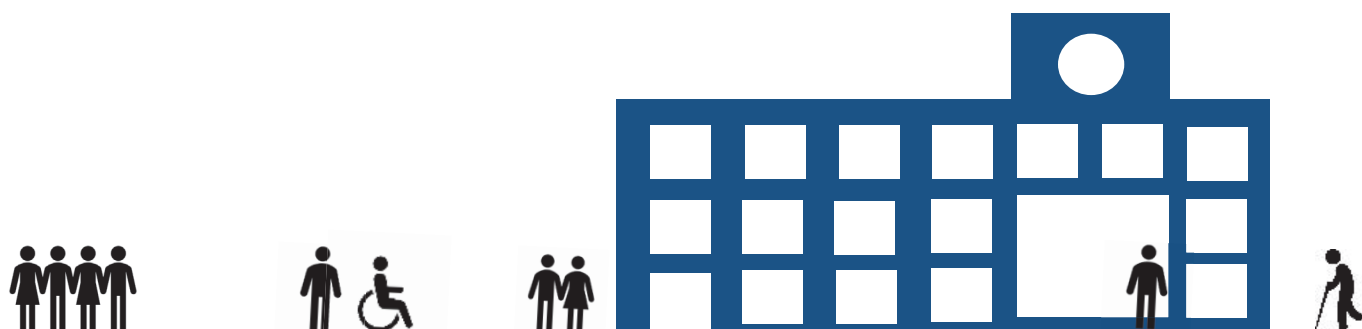


令和7年度（2025年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究
障害者の移行期の学びのモデル構築

**行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—**



2026年1月

令和7年度インクルーシブ・プログラム開発事業
相模原市・相模女子大学

令和7年度（2025年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究
障害者の移行期の学びのモデル構築

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—

目次

ご挨拶	1
実践報告	2
・2025年度の活動概要	3
・大学で学ぶ楽しみ発見セミナー（オープン・セミナー）	5
・ゼミ活動	11
・当事者による調査・研究「リサーチ活動」 （インクルーシブ・リサーチ）	16
・インクルーシブ・メディア	25
・学科横断プログラム こどもところ発達支援プログラム： 学生にとっての学びの意義	27
・学びや余暇の大切さを伝える「啓発講座」	28
・令和7年度インクルーシブ・プログラム開発事業 連携協議会	30
・2025年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括	35
・メディア掲載（プレスリリース）	37
・学会発表・論文等掲載（2025年度）	40
おわりに	43



ご挨拶

日頃から、相模女子大学・相模女子大学短期大学部の教育活動にご支援を賜りまして誠にありがとうございます。

相模原市と本学は、令和3年度より文部科学省による「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」に協働で取り組んでまいりました。このたび、5年目となる令和7年度の成果を報告書の形にまとめてお目にかけることになりました。

本学は今年度創立125周年を迎えましたが、多様性を包含した生涯教育の検討は、本学の社会貢献の一環としても大きな課題であり、その意味でも、この研究活動は本学にとっても重要な取り組みと考えております。これまでの実績にさらに積み重ねられた今年度の研究成果に基づき、持続可能な事業実施体制を構築し、さらなる生涯教育の充実をめざしてまいりますので、引き続きご支援ご協力を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、相模原市をはじめ、この実践研究に関わってくださったすべての方々に厚くお礼申し上げます。

令和8年1月

相模女子大学
相模女子大学短期大学部
学長 田畑 雅英

実践報告

2025 年度の活動概要

相模女子大学 日戸由刈（プログラム統括）

このインクルーシブ・プログラム開発事業は、相模原市が文部科学省から「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」として委託され、1) 相模女子大学が主体となって実施するインクルーシブな生涯学習の取組、2) 相模原市が主体となって実施する啓発講座や広報活動、事業評価のための連携協議会、という2本柱で構成される。主な対象は学校卒業後「働きながら、同世代同士での学びや交流を楽しみたい」と願う若者であり、軽度知的障害や発達障害の若者のニーズに適した内容を目指している。

本稿では1) インクルーシブな生涯学習の取組について述べる。この取組は2025年度より「SAGAPPA（さがっぱ）」の愛称を使い始めている。

(**SAGA** mihara inclusive lifelong learning Program & Package for young **A**dults ; **SAGAPPA**)

相模女子大学・学園キャラクター さがっぱ・ジョー



1. インクルーシブな生涯学習：2025 年度の新たな取組

2025 年度は、前年度までの基本構造（下図）を踏襲しつつ、新たな取組として相模女子大学での「学科横断プログラム」との連動が挙げられる。

学科横断プログラムとは、「学生が学科を横断して学ぶことで就職に向けた幅広い知識と実践力を身につけること」をねらいとした副専攻制度である。4つのサブプログラムのうち「こどもとこころ発達支援プログラム」に登録した子ども教育学科・人間心理学科の学生に対して、下図のオープン・セミナーやゼミ活動への参加を推奨している。

相模女子大学におけるインクルーシブな生涯学習の取組

※成果報告書等を元に
文部科学省が作成



経緯・概要

- 相模女子大学では、2021年度より相模原市と協働で、発達障害や知的障害の若者と同大学の学生がともに学ぶ「インクルーシブ・プログラム開発事業」を実施。
- 参加者が、同世代の若者と同じように仲間として過ごし、好きなことについて学ぶなど、豊かな人生を送るための生涯学習活動の在り方を考え、実践する取組。



(写真①) セミナーの様子

インクルーシブ生涯学習プログラム

- ・ 2024年度プログラムは、秋学期の土曜日に全9回実施。うち4回は下記の「オープン・セミナー活動」を実施。
- 【オープン・セミナー「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」】
(2024年度参加者数：当事者・学生あわせて各回約25名)
・ 障害の有無や性別に関わらず、若者なら誰でも参加できる、生涯学習プログラムの中核的活動。
- ・ 大学教員による講義・就労ワンポイント講座・趣味自慢タイムの3部で構成。講義の受講だけでなく、当事者と学生が自分の考えや趣味について、同じ立場で語る機会があることが特徴。
- 【ゼミ活動】 (2024年度参加者数：当事者4名、学生4名)
・ 当事者と学生の固定メンバーによるクロードな活動。顔なじみの面々だけで安心して思いを語り合うことができる対話の場としても機能。

エンバメント・プログラム

- ・ 「インクルーシブ生涯学習プログラム」を支える、当事者と学生による発展的な活動。
- 【リサーチ活動】 (2024年度参加者数：当事者5名、学生3名)
・ 当事者と学生による調査・研究活動で、オープン・セミナーのテーマや、意義や効果などを検討。
- ・ 当事者と学生がフラットな立ち位置での話し合いを大切にしながら、プログラムの中心であるオープン・セミナーの運営を、当事者と学生の協働により行っている。
- 【メディア活動】 (2024年度参加者数：当事者2名)
・ 普及啓発を目的に、当事者が主体となって、プログラムの取材や、動画の制作・編集・配信。

★活動紹介動画などが掲載されているホームページはこちら→



出典：文部科学省 HP「共生社会のマナビ：障害者の生涯学習推進ポータルサイト」

2. インクルーシブな生涯学習：2025 年度の成果

2025 年度の成果の詳細は、次頁以降を参照してほしい。要点は次の 3 点にまとめられる。

1 点目に、オープン・セミナー、ゼミ活動への参加者が、障害当事者・学生・卒業生ともに増加した。本学の取組では、セミナーへの安定した参加者の中から次年度のゼミ活動への参加者を募り、ゼミ活動終了者の中から「社会に向けた発信意欲の高い若者たち」がエンパワメント・プログラムに参加しセミナーやゼミ活動を下支えする、という循環モデルを展開している。セミナー・ゼミ参加者の増加は、今後の取組の発展を予測する強力な根拠となる。

2 点目に、エンパワメント・プログラムに参加する知的・発達障害の当事者（勤労青年）たちが活動 5 年目になり、より自信をもって活動をリードする役割を果たすようになった。さらに、2025 年度より本学卒業生 3 名が参加するようになり、コーディネーターの教員が関与しない場面で勤労青年・学生・卒業生による自由な交流機会が増えている。2025 年度のセミナー講師 4 名は、勤労青年と学生・卒業生だけで本学の教員一覧を見ながら「どの先生の話を知りたいか」を話し合っ選んでおり（教員の話で、楽しく盛り上がったらしい）、セミナー当日の「私の趣味自慢タイム」の司会進行も毎回、勤労青年と学生・卒業生が協力しながら和やかなムードで行っている。

3 点目に、エンパワメント・プログラムに参加する勤労青年全員が、社会に向けて本学の取組の紹介や自分たちの障害に関する発信を積極的に行うようになり、発表の機会が増え、マスコミで紹介される機会が格段に増えた。勤労青年たちに発信の動機を問うと、「学校を卒業すると、インプットとアウトプットの機会が限られてしまう。就職しても学び続け、意見交換をすることで、新たな発見があり、自分たちの置かれた状況をより客観的に判断できる」という趣旨のコメントが返ってきた。“生活の質（QOL）の向上・多様性理解・自己理解と自己権利擁護”というニーズは、障害の有無に関わらず、生涯学習のねらいそのものである。今後、勤労青年たちの発信に触発されて、本学でもインクルーシブ社会をリードする学生・卒業生が増えていくことを期待する。

3. 今後の課題

我々は、今後の課題を次の 3 点と考えている。1 点目は、本学の取組を今後も持続的かつ安定して運営するための組織体制づくりである。

2 点目に、セミナー参加者の増加に伴い、参加者の状態像がより多様化している。今後、専門性の高い個別対応へのニーズがより高まることが予測されるため、セミナーにおいて発達障害支援センターとの連携体制づくりが必要である。

3 点目に、これまで本学での取組の効果について断片的な報告は行っているものの、十分な検証は行っていない。生涯学習のねらいを“QOL の向上・多様性理解・自己理解と自己権利擁護”と考えるからには、これらの観点での計画的な検証が必要である。取組に携わる教員同士がチームを組み、組織的に研究計画を進めていくための体制づくりが課題である。

大学で学ぶ楽しみ発見セミナー（オープン・セミナー）

【活動の狙いと成果】

相模女子大学 武部正明（統括コーディネーター）

1. 大学で学ぶ楽しみ発見セミナー（オープン・セミナー）とセミナー体験会の概要

前述の「2025 年度の活動概要」にある通り、プログラム全体は「生涯学習プログラム」と「エンパワメント・プログラム」で構成される。利用する当事者や学生の募集は、図 1 の通りとなる。数年間この流れを継続する中で、参加者にとって無理のない学び方となっていると考えられる。オープン・セミナーは当事者や学生にとってインクルーシブな生涯学習の機会への敷居の低い最初のアクセスとして有効である。

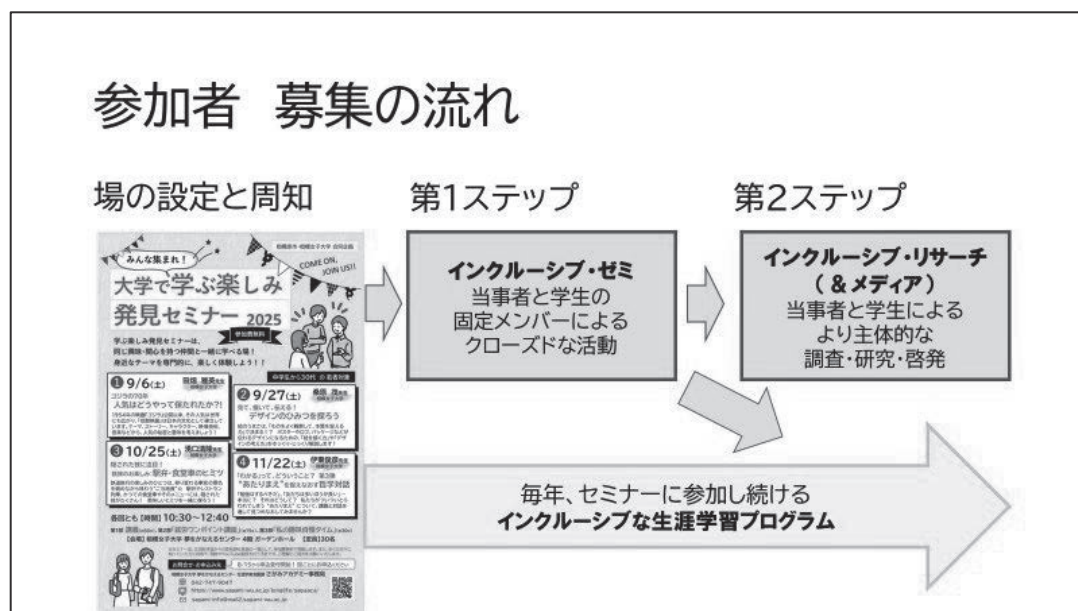


図1 参加者募集の流れ（第33回日本LD学会自主シンポジウム・企画趣旨，日戸，2025）より）

オープン・セミナーが敷居の低いアクセシビリティの高いプログラムと想定しているが、より参加しやすくなることを目的に2024年度から「セミナー体験会」を設けた。毎年6月に開催して、オープン・セミナーの第3部「私の趣味自慢タイム」を小グループで体験し、同世代の仲間と各自の趣味を披露し話すことで安心感と楽しさを経験することで、相模女子大学で開催される秋からのオープン・セミナーへの参加を動機づけることがねらいである。

2. セミナー体験会

今年度は、学科横断プログラムなどとリンクする工夫を行った結果、33 名の本学学生が参加した。参加者の詳細と参加した満足度は表 1 の通りである。

表 1 セミナー体験会の参加者の内訳と満足度

	参加者数	性別	所属	アンケート 回答数	主な参加理由 ※複数回答可 ※上位項目を記載
体験会	52 名 (リサーチメンバー11 名 を含む)	男 12 女 40	勤労者 15 中学生 1 大学生 : 33 卒業生 : 3	42 名 (リサーチメ ンバー除く)	とても満足 34 やや満足 8

※リサーチメンバー11 名は運営者のため、アンケートには回答していない

また、満足度の理由について、「色々な人の趣味を聞くことができておもしろかった」、「皆さんあたたかく聞いてくださったので、お話をしやすかったです」、「自分の趣味を話す機会が貴重なので緊張しましたし、あまり準備していませんでしたが、趣味の良さをアピールすることができて楽しかったです。みんな嬉しそうに語られていて、こちらも幸せを分けていただきました。」など趣味を介した交流、リサーチメンバーを含め参加者同士が皆の話を聴こうとする態度があり、安心して参加できたという内容が多かった。

春にセミナー体験会を開催し、秋からのオープン・セミナーへという流れを形成していくことができるとよいと考える。なお、相模原市が主催の「啓発連続講座」が 8 月と 9 月に開催されている。この講座もオープン・セミナーへの接続を想定している。体験会は本人をメインターゲットとし、啓発連続講座は、本人はもちろん保護者や教育・福祉関係者も対象としている。保護者等にオープン・セミナーや体験会が周知されることで結果的にそれが本人へ伝わることを期待している。このように多角的に潜在ニーズの掘り起こしを今後も行っていく。



「私の趣味自慢タイム」の様子

3. オープン・セミナー（2025 年度）

生涯学習プログラムである「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」（以下、オープン・セミナー）については、2025 年度も前年度と同様、第 1 部に「大学の先生の講義」、第 2 部に「就労ワンポイント講座」（働き続けるために必要なライフスキル）、第 3 部に「私の趣味自慢タイム」という構成で 4 回を企画・開催した。また、今年度も第 1 部の講義の企画や当日の司会進行をリサーチ活動のメンバー（以下、リサーチメンバー）が担った（図 1）。

大学で学ぶ楽しみ発見セミナー 2025

学ぶ楽しみ発見セミナーは、同じ興味・関心を持つ仲間と一緒に学べる場！身近なテーマを専門的に、楽しく体験しよう！！

1 9/6(土) 田畑 雅英先生
相模女子大学
ゴジラの70年
人気はどうやって保たれたか？！
1954年の映画「ゴジラ」公開以来、その人気は世界にも広がりました。「怪獣映画」は日本の文化として確立しています。テーマ、ストーリー、キャラクター、映像技術、音楽などから、人気の秘密と意味を考えましょう！

2 9/27(土) 桑原 茂先生
相模女子大学
見て、描いて、伝える！
デザインのひみつを探ろう
絵のうまさは、「ものをよく観察して、本質を捉える力」で決まる！？ ポスターやロゴ、パッケージなどが伝わるデザインになるための、「絵を描く力」や「デザインの考え方」をゆっくりじっくり解説します！

3 10/25(土) 湧口清隆先生
相模女子大学
隠された技に注目！
鉄道のお楽しみ：駅弁・食堂車のヒミツ
数連旅行の楽しみひとつは、移り変わる車窓の景色を眺めながら味わう「ご当地食」☆ 駅弁やレストラン列車、かつての食堂車やそのメニューには、隠された技がたくさん！ 美味しいヒミツを一緒に探ろう！

4 11/22(土) 伊東俊彦先生
相模女子大学
「わかる」って、どういうこと？ 第3弾
“あたりまえ”を捉えなおす哲学対話
「勉強はするべきだ」、「友だちは多いほうが良い」…本当に？ それはどうして？ 私たちがつい口をわけてしまう“あたりまえ”について、講義と対話を通して見つめなおしてみませんか？

各回とも【時間】10:30～12:40
第1部 講義 (各50分)、第2部「就労ワンポイント講座」(各15分)、第3部「私の趣味自慢タイム」(各30分)
【会場】相模女子大学 夢をかなえるセンター 4階 ガーデンホール 【定員】30名

お問合せ・お申込み先 8/15から申込受付開始！ 回ごとにお申込ください
相模女子大学 夢をかなえるセンター 生涯学修支援課 さがみアカデミー事務局
☎ 042-747-9047
🌐 <https://www.sagami-wu.ac.jp/longlife/sagaaca/>
✉ sagami-info@mail2.sagami-wu.ac.jp

田畑 雅英 桑原 茂
湧口 清隆 伊東 俊彦
川口 信雄

図 1 オープン・セミナーのチラシ及び申込サイト（抜粋）

さて、今年度のオープン・セミナーの運営体制は、以下の通りである（表 1）。

表 1 オープン・セミナーの企画・運営体制

役割	担当
企画・運営	武部正明（統括コーディネーター）
事務局	相模女子大学夢をかなえるセンター生涯学修支援課 （さがみアカデミー）
企画・ 当日の進行	リサーチ活動・メンバー： 岩本健吾・小野詩菜・加登川俊太・今藤孝拓・水野克隆（勤労青年） 下村爽香・丹沢桜子・常盤茜（相模女子大学 人間社会学部人間心理学科 卒業生） 大場千嘉・岡田結衣・長谷川璃子（相模女子大学 人間社会学部人間心理学科 4 年）

また、各セミナーの日時と第1部のテーマ及び講師は以下の通りである（表2）。

表2 2025年度のセミナーの日時と第1部のテーマ及び講師

開催日時	第1部のテーマ	講師
第1回 9月6日	ゴジラの70年 人気はどうやって保たれたか?!	田畑 雅英
第2回 9月27日	見て、描いて、伝える！ デザインのひみつを探ろう	桑原 茂
第3回 10月25日	隠された技に注目！鉄旅のお楽しみ： 駅弁・食堂車のヒミツ	湧口 清隆
第4回 11月22日	「わかる」って、どういうこと？ 第3弾 “あたりまえ”を捉えなおす哲学対話	伊東 俊彦

※各回とも開催時間は10時30分～12時40分（第1部から第3部まで）

セミナー各回のスケジュールは以下の通りである（表3）。

表3 セミナー各回のスケジュール

各回の構成	内容
オリエンテーション	事前説明
第1部（50分間）	講義（表1を参照）
第2部（15分間）	「就労ワンポイント講座」（講師 川口信雄氏及び当事者）
休憩（10分間）	
第3部（50分間）	「私の趣味自慢タイム」※小グループに分かれて実施
次回セミナーの案内及びアンケート記載	

2. 実施結果

全4回のセミナーの参加者アンケートの集計結果は表4の通りである。

（1）参加者について

2025年度については、①参加者数が2024年度（総参加者数101名）よりも約2割増えた（総参加者数124名）、②学科横断プログラム（こどもところ発達支援プログラム）の導入により定期的に子ども教育学科と人間心理学科の学生が参加できるようになったこと、③会場を学内のホールに固定化したことで正門から近くだどり着きやすくなったこと（2024年度は別会場の回があった）、という3点が挙げられる。



第1部の「講義」の様子

表 4 全 4 回のオープン・セミナー参加者の内訳（リサーチメンバーを含む）

	参加者数（申込者数） 内訳	性別	所属	アンケート 回答数	主な参加理由 ※複数回答可 ※上位項目を記載
第 1 回	23 名（26 名） 【内訳】 一般参加：12 名 リサーチ・メディア メンバー：11 名	男 9 女 14	就労者：10 （※就労支援等 を含む） 大学生：11 卒業生：2	12 （一般参加者）	教養を高めるため：6 趣味を充実させるため（自 分の趣味を話すなど）：6 生活を充実させるため：5 仲間や友人を得るため：5
第 2 回	32 名（33 名） 【内訳】 一般参加：21 名 リサーチ・メディア メンバー：11 名	男 13 女 19	勤労者：17 （※就労支援等 を含む） 大学生：10 卒業生：3 専門学校生：1 中学生：1	21 （一般参加）	生活を充実させるため：17 趣味を充実させるため（自 分の趣味を話すなど）：10 仲間や友人を得るため：9 仕事や就職に役立てるた め：9
第 3 回	32 名（34 名） 【内訳】 一般参加：21 名 リサーチ・メディア メンバー：11 名	男 13 女 19	勤労者：17 （※就労支援等 を含む） 大学生：11 卒業生：4	21 （一般参加）	生活を充実させるため：13 趣味を充実させるため（自 分の趣味を話すなど）：12
第 4 回	37 名（45 名） 【内訳】 一般参加：27 名 リサーチ・メディア メンバー：10 名	男 15 女 22	勤労者：25 （※就労支援等 を含む） 大学生：8 卒業生：1 専門学校生：1 中学生：2	27 （一般参加）	教養を高めるため：15 生活を充実させるため：14 趣味を充実させるため（自 分の趣味を話すなど）：10 仕事や就職に役立てるた め：10

（２）「第 1 部 講義」

①満足度について

「とても満足」＝5、「満足」＝4、「どちらともいえない」＝3、「やや不満」＝2、「不満」＝1 として集計した結果、各回の平均は 4.7～4.9 で、満足度は高い結果であった。

②「良いと思った点」について

参加者の主な理由は、次の通りである。

・（ゴジラの）映像や音楽の実際を見たり聞いたりできたことはより理解やイメージを膨らませることにつながってよかったと思う。

- ・実際に映像があったのがゴジラを見た事がなくても分かりやすかった
- ・よく見て描くだけが絵が上手くなるコツではなく、ロジック的な思考が大切だと知った。
- ・紙コップのふちがこういう形なのは、握った時の変形が小さくなるためだという事が判明して驚きました。
- ・駅弁の歴史が学べて楽しかった。スライドもワクワクした。
- ・難しいセミナーでも、改めて哲学の素晴らしさを知ったととてもいい勉強になりました。
- ・輪になって少人数で話せること。ルールが明確で、不安感がないこと

(3)「第2部 就労ワンポイント講座」

①満足度について

第1部と同様に算出した結果、各回の平均は4.7～4.9で満足度は高い結果であった。

②「良いと思った点」について

- ・実際に働いている人の趣味のお話を聞いて良かったです
- ・どんなに辛いことがあっても、自分には自分の役割があるということを再認識した
- ・毎回そうですが、ご本人さんからの話を聞けるのはすごくいいなと思います。
- ・インタビュー時間、歌が素敵でした。

(4)「第3部 私の趣味自慢タイム」

①満足度について

各回の平均は4.7～4.9で満足度は高い結果であった。

②「良いと思った点」について

- ・好きなもの(こと)が人に与えるエネルギーって大きいと思いました。
- ・私の話したラジオの趣味について共感してくれる人がいて良かったです。

③「私の趣味自慢タイム」のグループは、あなたにとってどのような場でしたか？」

- ・遠慮なく自分の趣味を言える場所です。
- ・安心安全の場。
- ・若者同士の交流の場だと思います。
- ・誰もが1人ひとりの趣味に興味を持って聴いてくれる場でした

(5) まとめ

2025年度においても第1部から第3部まで参加者の満足度は高い結果であった。第1部の講師はすべて相模女子大学の教員であり、普段は正課で授業を受けているが、当事者はもちろん学生にとっても「授業とは違い、楽しく学べる」機会となっている。第2部については川口信雄氏のライフスキル講座だけでなく、当事者のリアルな社会人生活の内容に対して障害の有無を問わず参加者が共感すると共に自身の生活をふり返り、今後の生活をイメージする貴重な機会となっている。

ゼミ活動

相模女子大学 宮野雄太（コーディネーター）

ゼミ活動の概要

ゼミ活動（インクルーシブ・ゼミ）とは、勤労青年と学生が繰り返し同じメンバーで集まり、交流する場である。メンバーは、オープン・セミナー（学ぶ楽しみ発見セミナー）に複数回参加していることを条件の1つとして参加できることになっている。ゼミ活動では、コーディネーターや本学卒業生がファシリテーターとなって、メンバー間の交流を促す。交流を通して、勤労青年は「大学で学ぶとはどういうことか」について、学生は「社会に出るとはどういうことか」について理解を深めていく。さらに、勤労青年と学生という属性の異なっていたものが、フラットな関係を築き、お互いに自己開示しながら、自然に仲間になっていく。具体的な活動として、現在は「パーソナルポートフォリオ」と「トリセツ相談会」が中心になっている。

パーソナルポートフォリオとは、それぞれのメンバーが1冊のクリアファイルに、「自分」を表すものを自由に収めてきて、その内容を紹介し語り合う活動である。例えば、自分の好きなもの、習い事、旅行の思い出、勉強していることなどをクリアファイルに収める。メンバーによっては、2センチ以上の厚みのパーソナルポートフォリオを持っている者もいる。この活動は、パーソナルポートフォリオという具体物を使って自分について話すことができるため、交流および自己開示の最初のステップとして取り組みやすい。



トリセツ相談会とは、職場・暮らし・将来について、自分の困っていることや悩んでいることを相談し、その相談ごとについてメンバーと一緒に考える活動である。相談は、ホワイトボードに記録をとりながら進めていく。トリセツ相談会は、自分の悩みや不安を自己開示し、解決策のアイデアを得られるものだが、さらに重要な点がある。それは、メンバーのフラットな関係性を促す機会が多くあるということである。この相談会では、学生が抱えている社会に出るうえでの悩みや不安に対して、すでに社会に出ている勤労青年が具体的に助言する場面が多く見られる。支援すること・教えることを志向していた心理・教育を学ぶ学生が、支援してもらう・教えてもらうという体験をすることで、関係性に変化が起き、これがフラットな関係への足がかりとなる。

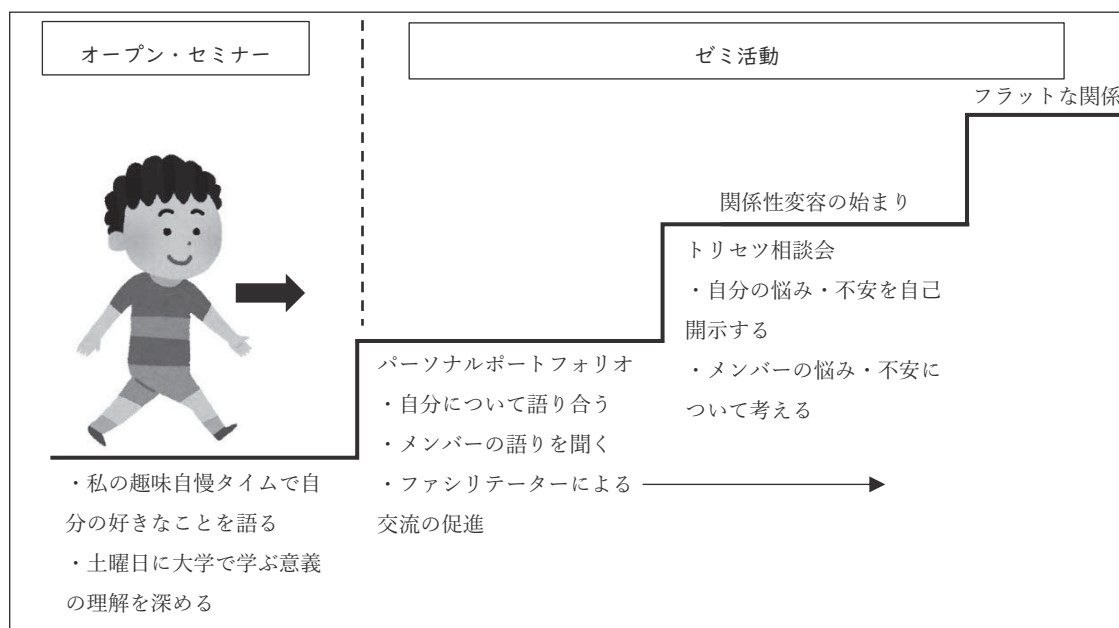
ゼミ活動における連続性・発展性

ゼミ活動が固定メンバーで繰り返し集まる場であるのは、このプログラムが連続性・発展性を含むものだからである。トリセツ相談会で自分の悩みや不安を自己開示し、メンバーがフラットな関係になることをゼミ活動の着地点としたときの、ゼミ活動の連続性・発展性は次のとおりである。

まず、ゼミ活動に参加する者は、オープン・セミナーに複数回参加している。これにより、土曜日に大学に来て学ぶことの意義を理解していることになる。また、オープン・セミナーの「私の趣味自慢タイム」で、自分の好きなことや活動を他者に紹介することに慣れている。ゼミ活動の連続性・発展性という枠組みの中で見ると、「私の趣味自慢タイム」は、ゼミ活動で自己開示することへの心の準備を整える活動と言える。

次に、ゼミ活動のパーソナルポートフォリオに取り組む。前述のとおり、「私の趣味自慢タイム」からの連続性・発展性である。実際、このゼミ活動で初めてパーソナルポートフォリオに取り組むメンバーの多くは、私の趣味自慢タイムのように自分の好きなことから紹介することが多い。そして、ゼミ活動を通じて、徐々に好きなこととは別の「自分」もパーソナルポートフォリオに収め、紹介するようになっていく。パーソナルポートフォリオを使って自分を語る経験やメンバーの語りを聞く経験は、トリセツ相談会で悩みや不安を自己開示し、助言することへの準備を整える活動である。

発展性と連続性があるゼミ活動の学習効果を十分なものとするには、メンバーが図1に示したような活動の階段を、順々に登っていくことが重要となる。もしトリセツ相談会のみを単発で行うような場合は、その学習効果は期待されるものではなくなるリスクがある。そのため、ゼミ活動ではメンバーの「出席」も重視しており、基本的にすべての活動に出席するよう伝えている。



フラットな関係を築くまでの連続性・発展性

2025 年度ゼミ活動

1) 参加メンバー

2025 年度のゼミ活動メンバーは 13 名であった。内訳は、勤労青年が 6 名、学生が 7 名であった。学生のうち子ども教育学科の学生が 3 名おり、子ども教育学科の学生がゼミ活動に参加するのは今年度が初めてであった。

2) 活動場所

今年度からゼミ活動の活動場所を変更した。これまでは相模女子大学の教室を使っていたが、今年度から相模女子大学附属図書館の学習室を使った。勤労青年が大学図書館に入館するのは初めてであり、「大学で学ぶ」という実感を得るための環境面の工夫として行った。大学図書館に入館するには、入館ゲートをくぐらなければならない。このようなゲートをくぐることに、大学で学ぶことへの気を引き締める効果があった。また、メンバーで図書館ツアーも行くと、専門書から漫画まで、様々な書籍が置いてあることが新鮮に感じられたようであった。また、学生の中には学期末のレポート作成の時期にしか図書館を利用しないものもいて、あらためて大学図書館の取り組みなどを知る機会となったようであった。例えば、11 月にエントランスを抜けると、大きなクリスマスツリーが目の前に飾ってあり、驚いている学生がいた。なお、図書館利用にあたっては、外部利用者申請の手続きについて、附属図書館の協力を得て実施できたものである。



相模女子大学附属図書館



3) ゼミ活動の予定

2025 年度のゼミ活動は全 5 回で、それらに加えて「初回オリエンテーション・入講式」などを加えて実施した。1 回あたり 90 分間で構成した。

2025 年度ゼミ活動の予定

実施日	時間	活動
11/8 (土)	9:00-10:30	パーソナルポートフォリオを使った交流 1
11/15 (土)	9:00-10:30	パーソナルポートフォリオを使った交流 2
11/29 (土)	9:00-10:30	トリセツ相談会 1
12/13 (土)	9:00-10:30	トリセツ相談会 2
1/31 (土)	10:00-11:30	私の夢・なりたい職業発表会, 成果報告会準備

4) 出席について

ゼミ活動は、連続性と発展性を伴うプログラムであるから、出席が重視される。好きな回に自由に参加できるオープン・セミナーとは違いがあるため、ソーシャルナラティブを使って出席についての情報提供を実施した。さらに、附属図書館の学習室に到着したら出席記録表に○をつけ、出席状況を自己チェックすることをルーティンにした。

出席については、「大学では、単位をとるのに3分の2以上の出席が最低限必要なのだよね。」と追加で情報を伝えると、勤労青年たちは非常に驚いており「大学で学ぶ」ということへ理解を深めていく様子をうかがえた。

インクルーシブ・ゼミの 出席について

ゼミの出席について 説明します。

ゼミは、すべてのスケジュールに 出席することで 学びが深まります。

しっかりと学びが深まった方は、ゼミの「修了証」を、1月31日の成果報告会で
もらうことができます。

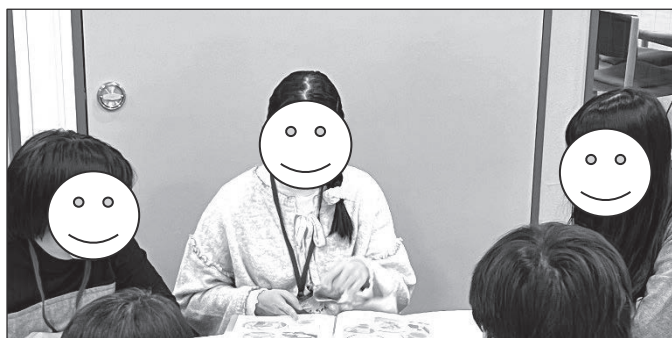
ただし、欠席があると、「修了証」を もらうことができない場合が あります。

もちろん、欠席することは 悪いことではありません。多くの人は、風邪を引いたとき、家族の
体調が悪いときなどに、欠席するものです。

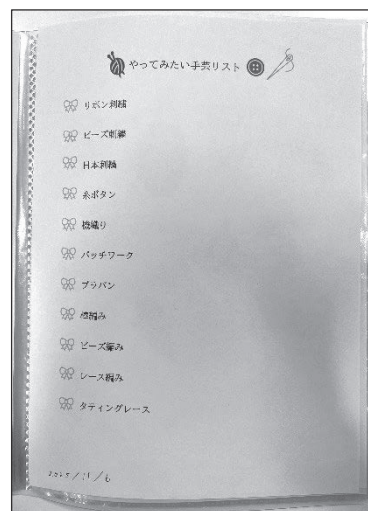
ゼミに出席するために、予定を確認したり、体調を整えたりすることは、良い考えでしょう。

5) パーソナルポートフォリオを使った交流

2025 年度のパーソナルポートフォリオを使った交流では、自分の好きなものに加えて、学校・習い事・職場で取り組んだこと、そしてそれらの場でもらった表彰状などが紹介された。また、「これからやってみたいことのリスト」を紹介するメンバーもいた。

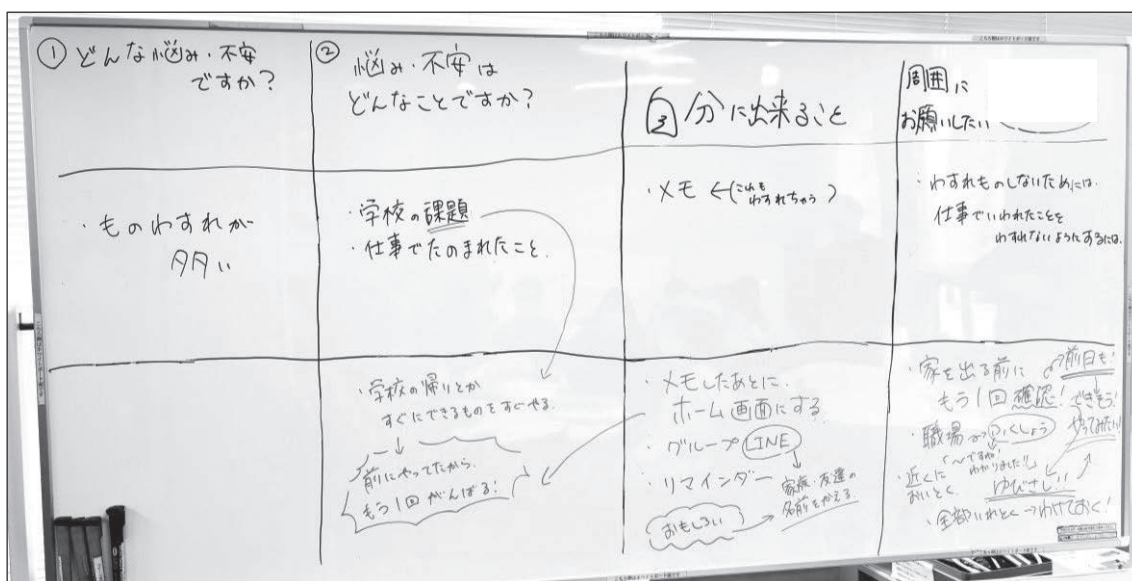


2025 年度パーソナルポートフォリオを使った交流の実際



6) トリセツ相談会

トリセツ相談会での相談を1つ紹介する。ある学生の「ものわすれが多い」という相談ごとに対して、メンバーから「メモをスマートフォンの待ち受け画面にする」「分けて少しずつ取り組む」などの助言が行われた。ある勤労青年からは、「職場では“指さし確認”をする」という助言もあった。そして、“指さし確認”は、相談者が「できそう、やってみたい」と選んだものの一つになった。



2025 年度トリセツ相談会の板書の一つ

これまでの成果と課題

ゼミ活動が終わった後に勤労青年と学生が自然と一緒に帰宅する場面も見られるようになり、「フラットな関係」が促進されていることがうかがえた。よって、2025 年度も一定の成果があったと考えられた。

課題として、運営面については、活動の「グラウンドルール」の設定がある。今年度、出席の重要性について確認した点に一定の効果があつたことを踏まえると、交流に集中できるように活動に関するグラウンドルールをあらかじめ設定し、オリエンテーションでアナウンスしていくとより円滑な運営ができると考えられた。

プログラム評価については、トリセツ相談会において、相談する体験だけでなく、相談される体験への着目も必要と考えられた。相談できたことに加えて、メンバーの悩みや不安の相談に応じられたという体験も、自己肯定感を高めている可能性がある。相談される体験の機能についても評価していくことで、ゼミ活動が参加者にポジティブな効果をもたらす仕組みを、より一層説明できるようになるものと考えられた。

当事者による調査・研究「リサーチ活動」(インクルーシブ・リサーチ)

1. 活動のねらいと成果

相模女子大学 武部正明(統括コーディネーター)

(1) 2025 年度の活動概要

オープン・セミナーの企画・運営に参画し、インクルーシブな視点で当事者にとって利用しやすい生涯学習プログラムの開発に関してアクション・リサーチとミーティング・リサーチを裏表で展開するようになって3年目の活動を終えた。2025年度の活動の成果として、一つ目は知的障害のある当事者の主体性が高まっていること(セミナー運営や学会発表など自分たちで自発的に準備、話し合いをしている)、加えて運営上あるいは学会発表上の疑問点の解消や運営上の改善点などについてコーディネーターへの自発的な相談が可能となっている。二つ目は学会発表等においてリサーチ活動の意義について、現在の活動での体験やこれまでの自身の経験に基づいて自分たちのことばで語ることが非常に多くなっている点である。継続的な活動により、活動の意義や達成感に繋がっているように思われる。三つ目は在学生に加えてリサーチやゼミを経験した本学の卒業生が学生チームに加わり、当事者たちと対等な関係を構築し、チームの一員となっている点である。当事者と学生・卒業生と立場は違うものの、知的障害者が大学で学ぶことの意義、障害の有無を問わず生涯学習に参加する意義について意見交換することで学校卒業後のインクルーシブな学びの場を自分たちで構築しようとしている様子が伺える。より当事者主体となるためにコーディネーターの関与の仕方などを今後再検討していく必要がある。

(2) 2025 年度の目標とスケジュール

メンバーは、岩本健吾、小野詩菜、加登川俊太、今藤孝拓、水野克隆(以上、当事者5名)、大場千嘉、岡田結衣、下村爽香、丹沢桜子、常盤茜、長谷川璃子(以上、学生・卒業生6名)での構成となり、リサーチチームとして1年間活動した。前述のとおり卒業生(就職して社会人)が加わり、学生にとっても生涯学習の機会となっている点が特徴である。

2025年度の目標は、リサーチチームに以下の表1で示す5点とした。①から③はオープン・セミナーの企画や運営に係る点で、知的障害のある当事者たちにとって魅力のある大学での生涯学習の機会とするためには、セミナーに参加する当事者たちとコミュニケーションを通じて感想や様子を観察して調査し(アクション・リサーチ)、それをまたリサーチメンバーとのミーティング(ミーティング・リサーチ)で意見交換することで、当事者にとって参加したくなる魅力的なセミナーにしていくことが可能となるという仮説を立てている。

次に、④は2025年度から2026年度の2か年計画での新たな企画として取り組んでいる。この企画のねらいは、①から③まで毎年セミナーをブラッシュアップしていくことでインクルーシブな生涯学習プログラムを開発・運営していくことができたとしても、地域の当事者たちにそのプログラムの存在が伝わっていなければ利用者は一向に増えていかないことに

なる。リサーチメンバーの当事者である 5 名は、自身が特別支援学校を卒業する際、就労後に大学で学ぶという選択肢そのものがなかったこと、現在も全国で知的障害者が就労後に学ぶ機会を保障している大学は少ないことを踏まえ、本セミナーを地域の当事者たちに伝えていく必要があると考えた。

さらに、⑤について、今年度は学会発表が自主シンポジウムだけでなく、各種シンポジウム等への依頼もあり、多くの登壇の機会を得た。ご依頼くださった方々、ご協力くださった方々に多大な感謝の意を表したい。

表 1 2025 年度の目標

活動内容	種別
①オープン・セミナーの企画 ・第 1 部の講義の講師案の策定	ミーティング・リサーチ
②セミナー及び体験会の運営 ・「私の趣味自慢タイム」の進行 ・参加者からの感想等の聴取	アクション・リサーチ
③セミナーの講師との事後ミーティングの開催 ・セミナー終了後、講師とふり返り	アクション・リサーチ
④「大学で学ぶ楽しみ」に関するリーフレットの制作 ・当事者主体で作ること	ミーティング・リサーチ
⑤啓発活動としての学会発表 ・当事者、学生にとっての学びについての啓発活動	アウトプット

2025 年度の活動スケジュールについては、4 月から 5 月に 1 回ペースでミーティング・リサーチ（目標①、②）、6 月 28 日にセミナー体験会（目標②）、また 6 月から 8 月までにミーティング・リサーチ及び外部講師とのワークショップ（目標④）、9 月から 11 月までにアクション・リサーチ（目標②、③）を行った。また、8 月からはオンラインでの打合せを含めて学会発表の準備を行った。時には、アクション・リサーチ終了後に学会発表のスライドを当事者のみで作成する日もあり、10 月から 12 月にかけて各シンポジウムで発表を行った（目標⑤）。今年度からは学生チームも登壇する機会も設けた。今後も学生チームの発表機会を増やしていく。

（3）2025 年度の活動報告

①オープン・セミナーの企画

リサーチメンバーで 2025 年度のオープン・セミナーの第 1 部「講義」の講師を立てて事務局へ提案することを 2024 年度に続いて行った。講師案を立てる際の原則は、「相模女子大学の専任教員から選ぶこと」、「過去に講師をしてくださった方のリピートの依頼も認める」、「講師に依頼をしても 4 人（全 4 回）にお引き受けいただけるかどうかはわからない

ため、ある程度の候補を挙げて交渉する順番をリサーチメンバー全員で合意すること」としている。リサーチメンバー全員で相模女子大学のホームページから「全教員」の紹介サイトを閲覧して依頼する候補の講師案を立てた。その結果、2025年度は、第1回をメディア情報学科・田畑雅英氏、第2回を生活デザイン学科・桑原茂氏、第3回を社会マネジメント学科・湧口清隆氏、第4回を人間心理学科・伊東俊彦氏にお引き受けいただくこととなった。

②オープン・セミナー及びセミナー体験会の当日の運営

リサーチメンバーは、6月28日の「セミナー体験会」、全4回の「オープン・セミナー」の第3部「私の趣味自慢タイム」の進行等を担った。いずれの回も初めて参加する若者への配慮として開始30分前に大学正門にて「お迎え隊」と称してナビゲーション役も毎回交替で担った（2人1組）。このようにメンバーがお客さんである当事者のことを想定していかに安心して参加できるかを皆で話し合い、実践した。



セミナー体験会でのリサーチメンバーの説明（「私の趣味自慢タイム」の実演）

③セミナーの講師との事後ミーティングの開催

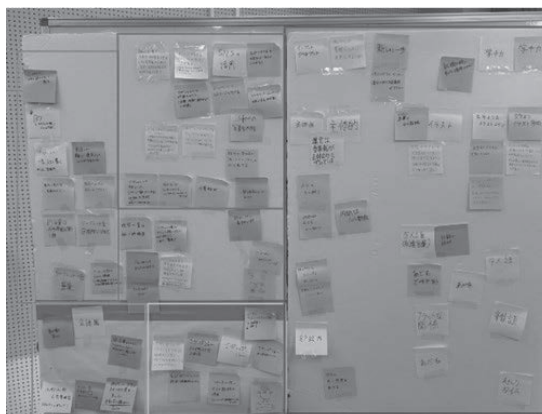
2025年度からセミナー終了後、会場にて講師とリサーチメンバーとで毎回ふり返りのためのミーティングをお願いして実施した。セミナーの内容について講師に感想を直接メンバーが聴き取り、次年度以降の企画や改善策に繋げることをねらいとした。



第1部「講義」の講師との事後ミーティング

④オープン・セミナーの普及・啓発リーフレットの制作

地域の当事者たちにセミナーの効果的に伝えるために当事者が手に取りやすく、読みやすく、読むことで参加への動機づけが高まるような当事者目線でのリーフレットを作成することとした。5月から8月まで毎月のミーティング・リサーチにて検討を重ねた。まずは、ブレインストーミング形式で「リサーチメンバーが考えるオープン・セミナーの意義」について意見を出し合った。



KJ 法の様子

その上で、毎年オープン・セミナーのチラシのデザイン等を依頼している萬木はるか氏（公認心理師）に本リーフレット制作について監修を依頼した。7月に萬木氏を講師に招き、①メンバー自身が最初にセミナーやゼミに参加するようになったきっかけ、その時の気持ちは？、②その後、継続して参加するようになった理由は何か？、③女子大学という点は気にならなかったのか？男性も女性も抵抗感はなかったのか？もし抵抗感があったならばそれを気にしなくなった理由は何か？、④セミナーの魅力とは何か？について意見交換を行った。また、若者が手に取りやすいリーフレットとはどういうものか？というミニレクチャーを交えていただきながら既存の様々なリーフレットやチラシを見ながら検討した。

リーフレット制作は2か年計画で実施しており、現在、メンバーが伝えたいと思うポイントの抽出、ページ構成について検討している段階である。2026年度に発行するため、引き続き作業を継続していく。



⑤啓発活動としての学会発表

詳細は「学会等発表」の個所を参照。

萬木氏とのワークショップ

2. 当事者にとっての学び

岩本健吾・小野詩菜・加登川俊太・今藤孝拓・水野克隆（プログラム開発協力者）

2025 年度のリサーチ活動に参加しての感想

（1）岩本健吾

これまでリサーチ活動は、「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」の運営として携わることが大半で、今年はセミナーの運営、およびリサーチの意義について話し合うミーティングと並行しながら、リーフレットのレイアウト作成を行いました。

4月や5月はリサーチのテーマが複数あり、さらに例年とは違う内容を行うと聞き、その当時は普段よりも自分の気持ちがやや不安定でしたので、「自分にできるかな？」と心配になり少し混乱しましたが、徐々に活動を続けていくにつれ、同時進行するスキルがわずかながら身についてきたような気がしました。

リーフレットの作成を行うことで、「どうしたら初めて参加する人が来てくれるのだろうか？」「どのように楽しく伝えた方が良いのか？」と考えるきっかけができたほか、自分が初めてセミナーに参加した時のことを思い出し、「はじめの一步をどう踏み出せたか？」と振り返ったこともありました。初めてセミナーに参加したのは6年前で、あの頃は平日に仕事をしているため、土日に大学に行く抵抗が少しありました。また女子大ということもあり、「自分は男性なので、女子大に行くのはどうかな？」と葛藤が生じていました。「次回もまた参加したいな！」と思うようになったきっかけは、その時のセミナーのテーマが自分の興味のあるもので、さらに仲良くしている友達と一緒にいったことでした。活動を続けているうちに、初めて大学に行った頃の緊張を忘れてしまったことに気がつき、ここ数年間は初めて来る参加者に寄り添う気持ちが足りなかったと反省をしております。リーフレットの作成を機に、初めて参加した時に「どういう気持ちでセミナーに行ったか」を振り返り、今度は自分たちが初めて参加する人や、セミナーを知ってもらいたい人にどう伝えたいのかを考えることができた1年間だったと思います。

また、セミナーの方では講師の先生とふり返りのミーティングをさせていただき、自分の想いをはっきり伝える自信にもつながりました。今までは「話がズレないかな？」とか「間違った言葉を使わないかな？」と不安になるばかりでしたが、川口先生をはじめ様々な先生方から「自分の想いを発信することが大切だから」というお話を聞き、少しずつ率直な意見が言えるようになりました。私もまだ自分で言葉を考えて話すのが苦手な部分がありますが、同じ悩みを抱えている人の参考になればと思います。言葉に詰まっても自分の意思を最後まで話せばそれで大丈夫です！当事者には当事者しか語れないこともありますので、その想いや私たちの活動の様子がたくさんの人に届けば良いなと思っています。

今後のリサーチ活動でも自分の可能性を伸ばしていき、新たな発見やスキルアップにもつ

なげていきたいです。

（２）小野詩菜

今年度、セミナーの運営を通して実感した事があります。それは、学生参加者の増加です。昨年度までは、当事者（勤労青年）の参加者が多いと感じていましたが、今年度は、インクルーシブプログラム参加者の学生だけではなく、他校の学生さんもいらして、段々とインクルーシブプログラムが広まってプログラム自体が大きくなっている事を実感しました。また、第三部で、学生も勤労青年と変わらず楽しく趣味自慢をしていた事がとても印象的で、勤労青年も学生も、障害の有無関係なく同じなんだと思いました。

今年度から始めた講師との事後ミーティングの中で、「大学の先生の研究は『趣味自慢』と同じ」という言葉を聞き、今までは第三部の趣味自慢タイムは講義とは少し違うのかなと思っていましたが、セミナーのプログラムすべてが繋がっているのだなと感じました。リーフレット作成で、見やすいパンフレットの特徴の調査、どんなレイアウトが良いかミーティングを行い、その中で、必要だと思っていたレイアウトでも、話を進めていくと必要無いものだったなど新しい発見があり、話し合いながらの検証は大切だと思いました。今年度の学会資料作成では、チームごとに作成をし、私は「知的障害者と共に学べる大学とは」をテーマに資料を作成しました。正直に言って、難しいテーマだと感じましたが、勤労青年のメンバーと一緒に考えた意見を元に、チームの人たちと協力しながら、時には遅くまで大学に残って作成を行いました。遅くまで大学に残って課題に取り組む事は、まさに「学生」のようだなと思いました。私がこのプログラムに参加して5年目になりますが、このプログラムで学生のように青春する事はあまりありませんでしたので、とても意義のある1年だったなと思いました。

（３）加登川俊太

リサーチメンバーの学生・勤労青年がフラットな関係で接することで、ミーティング時に改善点などの意見を言いやすくなり、楽しみながら活動が出来ました。休憩時間に一緒に会話をしたり、夕食をみんなで食べたりしてさらに親睦を深められたのも良かったです。

（４）今藤孝拓

今年は、新たにセミナー終了後に講師とのミーティングを行いました。講師とのミーティングをするにあたって私は司会を行いました。どのように進行すればいいか試行錯誤したこともあり、大変なこともありました。司会を行って、講師がどのように講義の準備をなさっているのかや参加者にわかりやすい講義にするためにどう工夫しているかなど、貴重な話を聞くことができたことがやって良かったと思います。

私の趣味自慢タイムで私は司会を担当することが多いのですが、経験を重ねてきたのも

あり、今回の講師とのミーティングでの司会も試行錯誤をしながらも修正しながら段取り良く行えたのは成長してきていると感じました。これからもこの活動を無理なく行っていければと思います。

（５）水野克隆

本年度は４月から活動がスタートし、早速、６月に向けて体験会の準備に入りました。昨年度と同様に第３部私の趣味自慢タイムの説明、メンバーの実演などをし、初めての人、経験者の方でもわかるように意識して運営をしました。

また我々の活動を広く知ってもらうために地域、学校に向けてのリーフレット作成をし、初めての経験なので、紙の大きさや内容、文字のフォント、色など、たくさん悩み、どうやったらみんなの手に取ってもらえるかを考えるのが大変でした。

そして今年からセミナーの講師をメンバーと選び、いろんな学科の先生を候補にした結果、セミナー講義では、毎回違う話が聞けるのでとても楽しめたのではないかと思います。回数を重ねるごとに参加者が増え、特に私の趣味自慢タイムでは、それぞれ素敵な趣味の発表をしてくれました。

課題として、参加者が増えた事で、３グループだとグループ全体の感想やアンケートまでいかなかったりすることがあったので、４回目のセミナーでは４グループに工夫した事で発表の時間、アンケートまで、スムーズに行えるようになりました。

学会発表では、事前に台本を考え本番は緊張しましたが、当事者の本音を参加者に伝えられました。



セミナー体験会のデモンストレーションの練習

3. 学生・卒業生にとっての学び

大場千嘉・岡田結衣・下村爽香・長谷川璃子（学生・卒業生）

2025 年度のリサーチ活動に参加しての感想

（１）大場千嘉

大学３年生の時に、インクルーシブ・ゼミに参加させていただいたことがきっかけで、４年生ではリサーチ活動にも参加いたしました。リサーチ活動を行っている中で「どうしたら相手は喜んでくれるのか？」を考える機会がとて多かったです。セミナーの講師を決める時も、セミナー参加者の趣味や興味のあるもの(例えば鉄道など)と関連する講師をみんなで選べた事が、リサーチ活動でしか体験できない大変貴重なことで、すごく楽しかったです。また、趣味自慢タイムでは、参加者が楽しく発表できるような時間配分、言葉がけなど細かい部分まで気をつける事ができたと感じます。この活動の中で、「相手がどうしたら喜んでくれるのか」、「どうしたら幸せな気持ちを生み出せるのか」をメンバー全員で考えてきました。自分のやる気はあるものの、みんなが「もう一度参加したい」と思えるセミナーにするためには、先生方やメンバー間での話し合い、協力が欠かせないと思います。活動は朝が早く、寝る事が大好きな私にとっては辛い部分もありましたが、今はみんなにお会いできる事が心から嬉しいです。どんな発言をしても否定せず、「いいよね」とフランクに受け入れてくれたメンバーがいたからこそ、すごく楽しく過ごす事ができ、大学生活での大きな思い出になりました。

この活動をもっと色々な人に知ってもらって、活動に関わる人みんなが笑顔になればいいなと思います！！ありがとうございました！

（２）岡田結衣

私はリサーチ活動を通して、多くの視点から物事を捉える大切さを学びました。セミナーの運営やリーフレットの作成など様々なことをメンバーと話してきましたが、自分にはない考え方・意見に触れる機会でした。この機会に、改めて多くの考え方があると認識し、「様々な意見を出し合う」ことの大切さを実感しました。メンバーだけではなく、セミナーの参加者や支えてくれる大人の方など様々な方のお話を聞く機会になりました。リサーチ活動を行っていたこの一年は私にとって一番人との繋がりを感じた一年です。また、「楽しい場」が与える影響についても考えることができました。土日に学校に来るということに最初は負の感情も持っていました。しかし、メンバーとの関係を通して「楽しい場」になってからは内容が大変であっても頑張ろうという気持ちになりました。「楽しい場」は自分のやる気に大きく影響しており、自分が社会に出てからも忘れない考えだと思います。

（３）下村爽香

このインクルーシブプログラムは、2017 年、私が大学 3 年生の時に始まりました。私は在学中からインクルーシブ・ゼミの活動を行っていて、卒業後は OG として関わっていました。今年度から初めてリサーチ活動に参加しました。昨年度までは経験者として見守る立場でしたが、今回からは横並びの関係で、学生や勤労青年と共に学ぶことができました。今年度は、学会やイベントでの発表が多くありました。私はこういったものの参加は初めてでしたので、とても貴重な体験になりました。セミナーの運営では、講師選びからメンバーで話し合って決められたのが嬉しかったです。自分たちがセミナーを作り上げているという実感がありました。セミナーの参加者も徐々に増えてきていて、嬉しく思っています。その一方で、人数が増えることでタイムキープが難しくなったり、全員のニーズに応えられなくなったりしている部分もあるため、工夫が必要だと感じています。今年度はセミナーのリーフレットの作成も始めました。内容・構成など、メンバー同士で意見を出し合って作っています。自分たちが身をもって感じたこの活動の良さを、うまく伝えられるように作るのが難しいですが、やりがいも感じています。この活動が必要としている方々にもっと届くように、これからも広く伝えていきたいです。

（４）長谷川璃子

私が初めて参加したのは 3 年生の時のインクルーシブ・ゼミになります。そこから 4 年生になり、新たにリサーチ活動を行うことになりました。リサーチ活動を行ったきっかけは将来に役立つのではないかと考えたからです。実際に勤労青年と学生で活動を行って沢山の学びが得られたと感じています。最初は距離感が掴めず、どう接して良いのか分かりませんでしたが、話し合いの休憩中にお菓子を食べながら談笑したり、あだ名で呼びあったりしているうちに学生と勤労青年が自然に混合して座るようになり仲が縮まったのを実感しました。私は元々セミナー参加者だったのでセミナー運営の仕方も勤労青年やリサーチメンバーに教えてもらいながら運営を続けてきました。今ではセミナー運営の流れを把握したことで主体的に動けるようになり、お互いが助け合える存在に成長したのではないかと思います。またセミナーのリーフレット作りでは、リサーチメンバーが案を出し合いブラッシュアップしてきました。私は発言をするのが苦手で最初は不安な気持ちのまま参加していましたが、勤労青年の堂々とした姿を見て自分の意見を言うことに少しずつではありますが抵抗がなくなってきました。メンバーと意見を出し合いながら、どうすれば見やすくなるのか、伝わりやすいリーフレットになるかと考えることは、リサーチメンバーの一員としての自覚を持った証拠だと思います。すでに沢山の方がセミナーを通してこの活動の必要としているのを感じているため、もっと沢山の方にも届けられるように精進したいです。

インクルーシブ・メディア

岩本健吾・今藤孝拓（プログラム開発協力者）

地内亜紀子（コーディネーター）・小林太郎（ボランティア）・武部正明

【今年度の活動報告】

○公式 LINE の配信

配信の計画案を年度初めに確認し、5月から月に1回2人で分担して計画的に「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」関連の文章を配信した。

コーディネーターと一緒に配信の方法を確認し、基本的な手順は理解することができ、公式LINE関連の目標はなんとか達成！

○今年度アップする動画について

・動画作成にむけての準備

毎年メディアチームは、「学ぶ楽しみ発見セミナー」関連の動画を作成し、YouTubeにアップロードしている。今年度の話し合いの中で、これまでセミナーに参加された方は社会人が多く、学生(中高生)が少ないことに気がつき、「どうしたらみんながセミナーに行きやすくなるのだろう？」という考えに至った。そこで「セミナーの楽しさをたくさんの人に知ってもらいたい」と思い、今年度はセミナーの講師を紹介する動画の作成を進めていった。12月現在動画の絶賛作成中。



○今後の活動予定(副学長のインタビュー・成果報告会の動画)

1月に上記の動画が完成した後、2月や3月はオフシーズンになるので、相模女子大学副学長の中村真理先生へのインタビューを行う。そして、成果報告会の様子を撮影した動画の編集をする予定である。

○当事者がメディア活動する事について

1. 今藤 孝拓

当事者が自分達でメディア活動を通して発信することで、当事者の想いがより伝わると思う。私は特別支援学校卒で卒業後は就職をした。正直、大学はどういう所なのか？とは思いはしたものの、自分には関係ないことで大学に行くことは頭になく、無縁だと思っていた。就職してから約半年間は、家と会社の往復をする日々に、少しマンネリしてきた頃だった。しかし、特別支援学校の進路の先生から大学でインクルーシブ活動をやってみないか？とお誘いがあり、参加してみることにした。

最初は休みの日に行くのはめんどうだとも思ったが、大学生が優しく接してくださり、活動も楽しいと感じるようになってきた。入学はしていないが、別の形で私でも、大学に行くことができるのか！と実感をした。これまでの私と同じように、家と会社（学校）の往復になっていてマンネリしてきている方や障害があって大学に興味はあるけど行く機会がない、行けない方がいらっしゃるのではないかと思った。

現在、私は相模女子大学が行っている「学ぶ楽しみ発見セミナー」の運営をしている。このセミナーで行っている内容についてメディア活動を通して自分達で発信することでそういった方々へより耳に響きやすいと思っている。

以上のことから当事者が自分達で発信することの大切さとなる。



2. 岩本 健吾

メディアチームのメンバーである、今藤と私はメディア活動を続けて今年で4年目になる。8月のミーティングで今藤が「相模女子大学に男性を受け入れる(セミナーに行く)ことについて他の方はどう思っているのだろうか？」という意見を出した。

さらに2人は「障がいのある人たちが大学に来ることをどう思っているのかな？」と考え、そこで副学長の中村先生にインタビューをしてみたいきっかけにつながった。

自分が聞いてみたいことを相手に質問し、相手のお話を聞くことでコミュニケーション力の向上に努めることができる。

メディア活動は、「計画」や「考察」の他にも「コミュニケーション」が大切だと思う。まだまだコミュニケーションは得意ではないが、苦なりに努力し、どうしたらより向上できるのかを今後の活動でも考えていきたい。



学科横断プログラム こどもとこころ発達支援プログラム： 学生にとっての学びの意義

相模女子大学 武部正明・宮野雄太・日戸由刈

2025 年度からインクルーシブ・生涯学習プログラムと相模女子大学の副専攻制度である「学科横断プログラム・こどもとこころ発達支援プログラム」との連携を開始した。「学科横断プログラム」とは、各学部・学科の学習に加えて、学科を横断した4つの「プログラム」を設けており、その中の「こどもとこころ発達支援プログラム」の「特別講座」及び「指定プロジェクト」にこのインクルーシブな生涯学習プログラムを位置づけている。この制度は卒業要件にはなっておらず、あくまで学生の主体的な学びを保障するためのものである。原則として、2年生から4年生までの3年間で「指定科目」、「特別講座」、「指定プロジェクト」をこなし、条件を満たせばオープンバッジというデジタル証明を大学が独自に発行している。所属する学科の講義に加えて他学科の講義を受講できること、外部講師の話や実践的な体験ができる。

「こどもとこころ発達支援プログラム」は、子ども教育学科と人間心理学科が協力して展開しており、2025 年度から開始した新しいプログラムである。子どもの発達を知り、理解を深めるためには、障害児・者のことを知ることは必須である。座学だけでなく、オープン・セミナーやセミナー体験会のような講義・趣味を介して当事者と直接コミュニケーションを図ることで自己・他者への気づき、発見する学びは教育や福祉・心理学を学ぶ学生にとってアクティブラーニングの機会になると考えている

(https://www.sagami-wu.ac.jp/features/cross_academic/child_heart/を参照)。

現在、子ども教育学科と人間心理学科の学生 11 名が登録している(2025 年 9 月末時点)。その中で、「特別講座」として位置づけたオープン・セミナー(大学で学ぶ楽しみ発見セミナー)、「指定プロジェクト」として位置づけた「インクルーシブ・ゼミ」にも継続的に学生が参加した。学生たちは例えば、オープン・セミナーに1, 2回参加しただけでも「当事者の皆さんは自分より大人っぽく、落ち着いていて、さすが社会人と思いました」、「私の趣味自慢タイムの進行が、時間配分にも気を配り、素晴らしかった」、「社会人になると仕事も大事だが、余暇がいかに大切なのかを知りました」といった感想を述べており、教科書では学べない要素を得ているように見受けられる。これまでゼミ活動、リサーチ活動でも継続的に参加した学生がそこでしか得られない学びをしてきた。その成果を土台にして、大学としてこの制度を導入したことで関心のある学生が幅広くこのインクルーシブな生涯学習プログラムにアクセスしやすくなり、修了書(デジタル証明)を発行する仕組みは学生にとってもメリットになると考えている。今後、学生からの感想やレポートなどを含め成果をまとめていくことが課題である。

学びや余暇の大切さを伝える「啓発講座」

相模原市発達障害支援センター

【背景と目的】

インクルーシブ生涯学習プログラムの開発により、発達障害や知的障害がある若者と学生が同じ当事者として共に考え、やりたいことや必要な支援を自ら発信するという、「当事者の主体性を尊重する活動」の一つのモデルを提示することができた。

一方で、本事業は、開発・啓発途上のもので、広く社会に認知されるまでには至っておらず、発達障害や知的障害がある若者に対して、どのように本プログラムを認知・理解してもらい、参加を促すかという点が課題となっている。令和6年度に引き続き、本事業の対象である発達障害や知的障害がある若者やその家族、教員、支援者に対して、学校卒業後の生涯学習や余暇の大切さを伝えるとともに、本事業を周知・啓発し、セミナーやゼミ活動への参加を促すことを目的として、啓発講座全2回を実施した。

【令和7年度の特徴】

令和6年度の実施形態がおおむね好評であったことから、令和7年度も、第1回は当事者、第2回は保護者・教員・支援者を対象者とし、平日と土曜日に開催した。

一方、これまで相模原市南部に位置する相模女子大学を会場としており、市内中央部や北部などからアクセスしにくいという課題があった。そのため、市内全域からの交通の利便性を考慮し、令和7年度は、第1回を相模女子大学、第2回を相模原市のほぼ中央に位置する「ウェルネスさがみはら」で開催した。

【内容】

タイトル	「人生ってなに?」「働くってなに?」「ずっと学んでなに?」
第1回	<p>日 時：8月1日（金） 13時半～16時</p> <p>会 場：相模女子大学及びZoomによるオンライン配信</p> <p>第1部：社会人生活準備講座</p> <p>～学校を卒業したら何をする？中高生からできる準備～</p> <p>梅永 雄二氏（早稲田大学 教授）</p> <p>第2部：対談で学ぶ社会人生活</p> <p>～仕事も学びも楽しむコツを聞いてみよう！～</p> <p>川口 信雄氏（株式会社はまりハ 顧問）</p> <p>小野 詩菜氏（インクルーシブ・プログラム開発協力者）</p> <p>岩本 健吾氏（インクルーシブ・プログラム開発協力者）</p>
第2回	<p>日 時：9月20日（土） 13時半～16時</p> <p>会 場：ウェルネスさがみはら</p> <p>第1部：障害者雇用の実際</p> <p>～“働く”現場のリアルを知る～</p> <p>天野 圭子氏（ビーアシスト株式会社）</p> <p>第2部：対談で学ぶ社会人生活</p> <p>～仕事も学びも楽しむコツを聞いてみよう！～</p> <p>川口 信雄氏（株式会社はまりハ 顧問）</p> <p>水野 克隆氏（インクルーシブ・プログラム開発協力者）</p> <p>今藤 孝拓氏（インクルーシブ・プログラム開発協力者）</p>

【周知・広報活動】

チラシ・ポスターの配布を、市内支援学校、県内インクルーシブ教育実践推進校、市内関係団体・事業所、市内公共施設、相模原市役所関連窓口等へ行った。また、プレスリリース、相模原市ホームページ、相模原市公式の SNS、相模原市広報紙、FM ラジオ、関係機関のホームページやメール配信を活用して周知を行った。

【実施結果】

参加人数について、第1回の事前申込者数は70名、当日参加者は56名(会場13名、オンライン43名)。第2回の事前申込者数は68名、当日参加者は48名(会場のみ)。

<アンケート満足度>

第1回：32名回答

▼満足…26名(81%)

▼やや満足…5名(16%)

▼どちらでもない…1名(3%)

第2回：25名回答

▼満足…21名(84%)

▼やや満足…4名(16%)

<アンケート自由記述(抜粋)>

当事者	「職場や自宅などで第三の居場所を求めることの必要性を考えさせられた。」「経験者の方々が、どのような事があったのかなどを知ることができ、参考になった。」等
保護者・家族	「将来に漠然とした不安がある状態で、いろいろな情報が知れてよかった。」「余暇スキルについて、考えたことがなかった。ハットした。」「子が何か感じたようで良かった。」等
教員	「変わらぬ趣味や頼れる場があるかが必要だと思った。」等
支援者	「当事者の方が、いきいきと楽しみながら活動されていることが印象に残った。」「ライフスキルに「楽しむ力」というのが入っているのは、目からウロコだった。」等

【今後に向けて】

上記のアンケート結果のとおり、本講座は一定の評価を得ており、参加者にとって生涯学習や余暇の過ごし方について考えるきっかけになっていると考える。また、今年度は、市内各地域からのアクセス改善を目的に、第1回、第2回で異なる会場を設定したが、期待どおり、昨年度に比べて、市内全域、特に市内中央部や北部からの会場参加者が増えた。

一方、課題として、申込者数がおおむね昨年度同様の水準で伸びていないこと、特に当事者の申し込みが少ないことが挙げられるが、保護者や教員、支援者は一定数の参加があり、参加すれば興味を持ってもらえることが多いように思われる。そのため、今後は当事者へ直接届けることを継続しつつも、保護者、教員、支援者等に本事業に興味を持ってもらい、彼らから当事者に働きかけてもらうという、間接的な啓発に力を入れることも一つの方法と考える。また、講座の対象を絞らず、広く市民一般に向けて本事業を啓発することも検討の余地があると考えます。

今後も啓発講座を通して、生涯学習や余暇の充実が生活の質の向上や精神的健康につながるということをより多くの人に伝え、本事業を広く社会へと普及させていきたい。

令和7年度インクルーシブ・プログラム開発事業 連携協議会

連携協議会では、発達障害や知的障害のある若者にとっての生涯学習の意義について、市内の教育・福祉の関係者、有識者の間で共通認識を図ることを目的に、当事者を交えて意見交換を行う。今年度、生涯学習プログラムの研究・開発について協議した内容を報告する。

<委員>

所属等	氏名
(株)はまりハ 顧問	川口 信雄
東京学芸大学教職大学院 教授	藤野 博
信州大学医学部 子どものこころの発達医学教室 教授 附属病院子どものこころ診療部 部長	本田 秀夫
神奈川県立相模原中央支援学校 校長	片山 葉子
神奈川県立橋本高等学校 教頭	柴山 克久
神奈川県立上鶴間高等学校 教頭	河内 卓矢
社会福祉法人相模原市社会福祉事業団 地域支援課 課長	榎本 幸良
社会福祉法人風の谷 施設長	西村 三郎
相模女子大学 副学長（連携・キャリア担当）	中村 真理
相模女子大学 総務担当理事（事務局長）	本橋 明彦
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 准教授	狩野 晴子
インクルーシブ生涯学習プログラム開発協力者代表（第一生命チャレンジド株式会社）	小野 詩菜
インクルーシブ生涯学習プログラム開発協力者代表（社会福祉法人江東ことぶき会オハナ新羽保育園）	水野 克隆
インクルーシブ生涯学習プログラム開発協力者代表（県央福祉会）	下村 爽香
インクルーシブ生涯学習プログラム開発協力者代表（相模女子大学人間社会学部人間心理学科）	大場 千嘉
相模原市市民局スポーツ推進課 課長	加藤 千恵子
相模原市健康福祉局地域包括ケア推進部 高齢・障害者福祉課 課長	奈良 美幸
相模原市教育委員会教育局支援教育課 課長	西内 一裕
相模原市教育委員会教育局生涯学習部 生涯学習課 課長	今野 裕之

<事務局構成員>

所属等	氏名
相模原市こども・若者未来局こども家庭支援部 陽光園 所長	山本 克哉
相模原市こども・若者未来局こども家庭支援部 陽光園発達障害支援センター 所長	中山 千春
相模原市こども・若者未来局こども家庭支援部 陽光園療育相談室 室長	頼本 鏡子
相模原市こども・若者未来局こども家庭支援部 陽光園発達障害支援センター 主査	川崎 祐介
相模原市こども・若者未来局こども家庭支援部 陽光園発達障害支援センター 主任	後藤 成海
相模原市こども・若者未来局こども家庭支援部 陽光園発達障害支援センター 主任	小松原 裕輔
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 教授	日戸 由刈
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 准教授 統括コーディネーター	武部 正明
相模女子大学学芸学部子ども教育学科 専任講師 コーディネーター	宮野 雄太
横浜市総合リハビリテーションセンター コーディネーター	地内 亜紀子
相模女子大学夢をかなえるセンター 部長	武石 聡子
相模女子大学夢をかなえるセンター 生涯学修支援課 課長	会田 恵子
相模女子大学夢をかなえるセンター 生涯学修支援課 係長	横田 智子

第1回 会議録

会議名	令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業 インクルーシブ・プログラム開発事業 第1回連携協議会
開催日時	令和7年6月28日（土） 14時～15時30分
開催場所	相模女子大学 マーガレット本館1階 会議室1
出席 委員	16名：川口信雄氏、藤野博氏、片山葉子氏、河内卓矢氏、榎本幸良氏、 西村三郎氏、中村真理氏、本橋明彦氏、狩野晴子氏、小野詩菜氏、 水野克隆氏、下村爽香氏、大場千嘉氏、奈良美幸氏、西内一裕氏、 今野裕之氏 欠席者：本田秀夫氏、柴山克久氏、加藤千恵子氏

者	事務局	13名：山本克哉、中山千春、頼本鏡子、川崎祐介、後藤成海、小松原裕輔、日戸由刈、武部正明、宮野雄太、地内亜紀子、武石聡子、会田恵子、横田智子
議題等		(1) 令和6年度成果について (2) 令和7年度事業計画について
議 事 の 要 旨		
<p>学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業及び令和7年度連携協議会について、事務局（市）より資料に基づき説明を行った。</p> <p>また、本協議会会長選出について、互選により川口委員が会長に選出され、承認された。</p> <p>議題（1）令和6年度成果について 本事業のこれまでの経緯について、川口会長より資料に基づき説明を行った。 事務局（市及び大学）より資料に基づき説明を行った。</p> <p>（2）令和7年度事業計画について 事務局（市及び大学）より資料に基づき説明を行った。</p> <p>【意見交換】※抜粋</p> <p>下村委員：今年度からインクルーシブ・リサーチに参加して、セミナーの運営をしている。誰が中心というわけではなく、フラットな関係性でメンバーそれぞれが意見を出せることがすごく良いと思っている。自分たちでセミナーの講師を決められるなど、自分たちでセミナーを作っているという実感が沸く。</p> <p>小野委員：土曜日にプログラムがあり、休みの日は休みたいという気持ちもあるが、こういう活動に参加することには意義を感じている。回を重ねるごとにメンバーと仲良くなり、楽しくなっているので続けていきたい。</p> <p>水野委員：普段の仕事では大変なことも多々あるが、体験会やリサーチ活動が息抜きになっている。より良いものを作るために、一緒に考えたり、人の意見を聞いて意見交換したりできる、すごく意義のある活動と感じている。参加できることが嬉しい。</p> <p>大場委員：障害をもっている方と関わる機会はなかったが、この活動を通して、みんながいろいろな意見を持っていると知ることができて自分の成長につながっている。</p> <p>藤野委員：大学と自治体が連携してこのような事業を行うのは日本初だろうと思う。12月の総合リハビリテーション研究大会では、日戸先生、武部先生にご登壇いただいて、本事業を紹介させてもらう。全国各地にこういった取り組みが広がると良いと考えている。</p> <p>片山委員：学校卒業後の生活を豊かにする上で、選択肢がたくさんあることは大切だと思う。体を動かしたい方も、学びたい方も、もっと違うこと、例えば鉄道などを楽しむ方もいる、こういう選択肢が増えることは大切だと思う。</p> <p>河内委員：若い方の話を聞き、意義のある活動だと感じた。本校にも将来に不安を抱えている生徒がいるが、そうした生徒にとって、このような学ぶ機会があることは良いと感じたので、</p>		

宣伝していきたい。

榎本委員：みなさんが自主的に参加しているという印象を受けた。体験会の参加者の感想で、「自分から主体的に関われることに喜びを感じている」といったことを話している方がいた。

西村委員：福祉の現場は人材不足で、若い人に辞めないで欲しいと思っているが、こうした生涯学習が働く人にとって、仕事を続けるためのエネルギーになるのではないかと感じている。

狩野委員：インクルーシブ・プログラムは回を重ねるごとに進化を遂げていると感じる。一方で、インクルーシブ・リサーチを始めた経緯として、自分自身の権利擁護を狙いとするところもあったが、徐々にプログラム化され、マニュアル化されていっていることに危険性も感じている。「自分たちで学ぶことの権利」を伝えていくのが大切だと思う。

西内委員：本日の話を聞き、学ぶ楽しさ、成長できる喜びというものが人生にとって大きいとも感じた。学校生活の中でそういう喜びや成長を感じられるように、支援教育の推進をしていきたいと思っている。

以 上

第2回 会議録

会議名		令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業 インクルーシブ・プログラム開発事業 第2回連携協議会
開催日時		令和7年10月25日（土） 14時～15時30分
開催場所		相模女子大学 マーガレット本館1階 会議室1
出席者	委員	12名：川口信雄氏、片山葉子氏、西村三郎氏、中村真理氏、小野詩菜氏、 水野克隆氏、下村爽香氏、大場千嘉氏、加藤千恵子氏、奈良美幸氏、 西内一裕氏、今野裕之氏 欠席者：本田秀夫氏、藤野博氏、柴山克久氏、河内卓矢氏、榎本幸良氏、 本橋明彦氏、狩野晴子氏
	事務局	13名：山本克哉、中山千春、頼本鏡子、川崎祐介、後藤成海、小松原裕輔、 日戸由刈、武部正明、宮野雄太、地内亜紀子、武石聡子、会田恵子、 横田智子
議題等		(1) 啓発講座報告 (2) 生涯学習プログラム報告 (3) 学会報告 (4) 成果報告会について
議 事 の 要 旨		
議題に先立ってインクルーシブ・ゼミ入講式を行った。入講式では、インクルーシブ・ゼミ参加者及びリサーチメンバーの自己紹介を行い、相模女子大学中村副学長、陽光園山本所長から激励の言葉が送られた。		

- 議題
- (1) 啓発講座報告
事務局（市）より資料に基づき説明を行った。
 - (2) 生涯学習プログラム報告
事務局（大学）より資料に基づき説明を行った。
 - (3) 学会報告
事務局（大学）より資料に基づき説明を行った。
 - (4) 成果報告会について
事務局（大学）より資料に基づき説明を行った。

【意見交換】※抜粋

小野委員：啓発講座の第1回に登壇した。アンケートで「満足」が多かったことはうれしい。私たちの話を聞いて参考になったという言葉聞き、私たちの体験談に意味があると感じた。これからも頑張っていきたい。当事者の方の申込が少ないという話があった。未来を予想するのが苦手なこともあって、申込が少ないのかもしれない。当事者の方に理解できるように発信していきたい。

水野委員：今、仕事を休職している。趣味はたくさんあるが、それでは足りないと感じている。仕事のことで気分が下がっている状態で、家族に相談するが、プロに聞きなさいとなるため、勤労青年や大学生、相模女子大の先生に相談している。趣味のことだけではなくて、困っていることや悩みも相談できる場になっていて、すごく良いと感じている。

西村委員：小野委員、水野委員から、ここに参加したことで生活が豊かになっているということを発信してもらっていることは、とても素晴らしい、プログラムが広がってほしいと感じている。

奈良委員：成果報告会では、当事者の話をメインにするということで、当事者の話を聞ける機会が多くなるのはとても良いことだと思う。

今野委員：インクルーシブ・ゼミに、こども教育学科の学生さんも入るようになったということで、学科を越えて入っていただいたこと、とてもうれしく思う。今参加してもらっている方は主に当事者、保護者、支援者だが、そこに入っていない、地域の方、社会全体にインクルーシブを理解してもらって取り組んでいくことが大切だと感じている。

以 上

2025 年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括

「インクルーシブ教育がつくる新しい大学のカたち」

連携協議会会長 川口信雄

1 インクルーシブ教育の意義

筆者が設立に携わった横浜わかば学園（横浜市立若葉台特別支援学校）の 1 期生は今年 28 歳、社会人 10 年目だ。正社員への登用、1 人暮らし、結婚等それぞれに自分の道を切り開いている。インクルーシブ・プログラムを立ち上げようと考えたのは、卒業生の次のような声を聞いたことが大きなきっかけだった。「18 歳で働き、社会の中で自分の役割を果たしていることには誇りを持っているが、卒業時に進学という選択肢も欲しかった、大学ってどんなところなのか知りたい」。

特別支援学校高等部卒業生の進路は就労か福祉の二択の現実があり、大学進学は想定されていない。一方、世界では大学におけるインクルーシブな学びが広がってきている。欧米や韓国などでは知的障害があっても本人の学ぶ意志を認め、一人の大学生として受け入れているケースが数多く報告されている（『知的障害の若者に大学教育を』クリエイツかもがわ 2019）。

この背景には 2006 年に採択された国連障害者権利条約の存在がある。同条約、第 24 条、第 5 項には「締結国は、障害者が差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができる」とある。アメリカではこの条約を受けて 2008 年に「高等教育機会均等法」を改正し、それまでは経済的に苦しい学生への支援が対象だったものを、知的障害者の高等教育機会の拡充まで広げた。2014 年に同条約を批准しているわが国にとっても「障害者が大学で学ぶ」ことは喫緊の課題と言えよう。日本ではまだアメリカのような具体的な法改正は行われていない。しかし、法改正を待っていては手遅れになる。そこで筆者らは「生涯学習」からスタートすることにした。

さて、筆者は卒業生に会うと「休日の過ごし方」を尋ねることにしている。「乗り鉄」や「アニメの聖地巡り」などの答えが返ってくると「大丈夫、やっていけそうだ」と一安心する。余暇が充実している人はそのために仕事を頑張ろうと思えるからだ。逆に心配なのが「仕事一途な人」や「休みの日にやりたいことが特にない人」。こういう方は仕事で嫌なことや失敗があるとリフレッシュする場がないので心が折れやすい。また、休日の居場所もポイントになる。社会に出ると職場と自宅の往復が生活の中心になりマンネリに陥りやすいのだが、休日に家庭以外の居場所があると毎日の生活にメリハリと潤い生まれる。「休日の居場所の一つに大学を」という思いもインクルーシブ・プログラムにはこめられている。

そもそも大学の学びとは、教員は自分の追及しているものを語り、その受け止めは大学生に任せられており、すぐに役立つ学びではないことも多い。多少難しくとも自由でおおらかな大学の学びの一端を勤労青年が経験できることの意義は大きい。また、大学で同年代の大学生と共に学ぶ経験は、勤労青年に「社会人としての誇り」を実感させてくれる。このこと

は働くことへの意欲にもつながっている。

一方、大学生は共に学び、自己開示し、生きづらさや悩みを相談する中で、自己理解や障害理解を深めていった。大学生の声を紹介する。「障害のあるなしに関係なく、自分の苦手に対して対策を考え、それを行動しようとするのが大切なのではないかと思った」。また、「就職に悩んでいた時期に、ここでのいろいろな方との関わりが、福祉系という進路選択にも繋がった」のように大学生のキャリア教育にも貢献している。

このように勤労青年と大学生は「共に学ぶことで共に変わる」ことができるのだ。

2 人はなぜ学ぶのか

1964年に大ヒットした人形劇に「ひょっこりひょうたん島」がある。この作品では「ドン・ガバチョのテーマ」など数々の名曲が生まれたが、中でも「サンデー先生のテーマ」は深い。勉強嫌いな子どもたちが「勉強は何のためにしなければいけないの？えらくなるため？お金持ちになるため？」と問いかける。それに対し、島唯一人の教師、サンデー先生は歌う「いいえ賢くなるためよ、男らしい男、女らしい女、人間らしい人間、そうよ、人間になるために勉強なさい」と。ここには学びの本質が表現されているのではないだろうか（今から約60年前の番組なのでジェンダー的にアウトな部分はお容赦のほど）。

就労は大切だが、そこがゴールではない。ゴールは「社会の中で豊かな人生を送ること」にある。そのためには学校卒業後に学び続ける場があることは重要だ。しかも、障害の有無に関係なく共に学ぶ場が。第2回連携協議会で、ある勤労青年が「趣味はたくさんあるが、それだけでは足りないと感じている。リサーチ活動などでみんなと会えるのはすごくうれしい。みんなと意見交換することは意義のあることだ」と発言された。これを聞き勤労青年と大学生による「当事者主体」の活動をさらに進めていこうという思いを新たにした。

相模女子大学を舞台にしたインクルーシブ・プログラムは全学的な支援体制が整えられつつある現在も試行錯誤の連続である。今年度から相模女子大学の学科横断プロジェクトに位置付けられ、人間心理学科の学生に子ども教育学科の学生も加わった。また、ゼミの会場を附属図書館のグループ学習室に変更し、より大学らしい学びの環境を整えると共に、勤労青年には「出席」の意識付けを行い、大学の単位認定の雰囲気も体験してもらうように工夫している。また、横浜わかば学園出身者以外の当事者青年の参加も増加してきている。この背景にはメディア活動の充実、相模原市啓発講座や広報誌でのセミナー周知などがあると思われる。最近では相模女子大学の卒業生でインクルーシブ・プログラムに参加する方も増加中で、なかには育休中にお子さんを連れて参加している卒業生もいる。このことは大学卒業生にとっても「共に学び続ける場」が大切なことの証左と言えよう。

日本各地の大学でその大学に合った「インクルーシブな学び」が試みられ、「もっと学びたい」「キャンパスライフを楽しみたい」という若者に大学の学びの場が広がっていくことを切望している。「共に学ぶことで共に変わる」経験は知的障害や発達障害のある青年、大学生のいずれにとってもかけがえのない「学び」の時となるのだから。

メディア掲載

掲載先	掲載日	タイトル	URL 等
大学プレスセンター（大学通信）	2025 年 6 月 19 日	6/28「学びたい」をあきらめないー「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー体験会 2025」開催 障害のある若者と大学生がともにつくる学び場づくり 発達・知的障害のある若者が"教室のつくり手"として活躍中	https://www.u-presscenter.jp/article/post-56622.html
すばるコレクト（株式会社 EDUWARD Press）	2025 年 11 月 1 日	日本発達障害学会 第 60 回研究大会 開催レポートー知的障害・発達障害者の学習・行動・生活支援の到達点と新たな一歩ー	https://subarucollect.jp/detail/425/
超福祉の学校@SHIBUYA（NPO 法人ピープルデザイン研究所）	2025 年 11 月 3 日	就労×余暇～仕事も遊びも、そして学びも全部大切！～	https://www.youtube.com/watch?v=QK5BlqBxWZI&t=2s
LITALICO 発達ナビ（株式会社 LITALICO）	2025 年 11 月 14 日	インクルーシブ教育、幼保小連携、教員の専門性…支援の最前線を学ぶ！「日本 LD 学会」レポート【アーカイブ配信中】	https://h-navi.jp/column/article/35030822
LITALICO 仕事ナビ（株式会社 LITALICO）	2025 年 11 月 18 日	「好き」を楽しむ力は人生に大切なスキル！年齢、立場、障害の有無にかかわらず学べる「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー2025」レポート in 相模女子大	https://snabi.jp/article/708
すばるコレクト（株式会社 EDUWARD Press）	2025 年 11 月 26 日	大学で学ぶ楽しみ発見セミナー 第 4 回 参加レポート（2025 年 11 月 22 日）	https://subarucollect.jp/detail/463/1/
神奈川県庁	2025 年 12 月 15 日	共生社会実践セミナー～ともいき交差点 2025～【アーカイブ配信予定】	https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/kyousei-forum.html

※相模女子大学インクルーシブ・生涯学習プログラムのサイトでも情報配信中です。

<https://www.sagami-wu.ac.jp/longlife/inclusive/>





【相模原市】障害のある若者に生涯学習の機会を！相模女子大学と連携して「インクルーシブ・プログラム開発事業（さがみはら・学ぶ楽しみ発見プログラム）」の一環として、啓発講座を開催します

啓発講座を8月・9月に開催。現在参加者を募集中です



このたび、「インクルーシブ・プログラム開発事業（さがみはら・学ぶ楽しみ発見プログラム）」の一環として、啓発講座「人生ってなに？」「働くってなに？」「ずっと学んでなに？」を8月・9月に開催します。

この講座は、学校卒業後、就労だけではなく、障害があっても同世代の若者と同じように仲間と過ごすことや、学びを深めることの大切さについて理解を深めるための講座となっています。

○インクルーシブ・プログラム開発事業（さがみはら・学ぶ楽しみ発見プログラム）概要

相模原市では、文部科学省から「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」を受託し、市内南区に立地する相模女子大学と連携して、発達障害や知的障害のある若者を対象とした、インクルーシブ※な生涯学習のためのプログラム開発に取り組んでいます。※「インクルーシブ」とは「全てを含む」という言葉で、さまざまな特性を持つ人たちが共に過ごすことを意味しています。

○啓発講座「人生ってなに？」「働くってなに？」「ずっと学んでなに？」 実施概要

【第1回】

日 時：8月1日（金）午後1時30分～午後4時

テーマ：第1部 社会人生活準備講座

～学校を卒業したら何をする？中高生からできる準備～

第2部 対談で学ぶ社会人生活～仕事も学びも楽しむコツを聞いてみよう！～

講 師：第1部 梅永 雄二氏 早稲田大学教授

第2部 川口 信雄氏 株式会社はまりハ顧問

働きながら学びを楽しむ若者

（インクルーシブ・プログラム開発事業協力者）

会 場：相模女子大学（住所：相模原市南区文京 2-1-1）またはオンライン

対象者：発達障害や知的障害のある中学生以上の若者

申 込：7月24日（木）まで

【第2回】

日 時：9月20日（土）午後1時30分～午後4時

テーマ：第1部 障害者雇用の実際～“働く”現場のリアルを知る～

第2部 対談で学ぶ社会人生活～仕事も学びも楽しむコツを聞いてみよう！～

講 師：第1部 天野 圭子氏 ビーアシスト株式会社大宮事業所長

第2部 川口 信雄氏 株式会社はまりハ顧問

働きながら学びを楽しむ若者

（インクルーシブ・プログラム開発事業協力者）

会 場：ウェルネスさがみはら7階視聴覚室（住所：相模原市中央区富士見 6-1-1）

対象者：発達障害や知的障害のある中学生以上の若者の保護者、教員、支援者

申 込：9月11日（木）まで

※詳細・申込みは市ホームページをご確認ください。

<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kosodate/fukushi/1029653/1033333.html>

学会発表・論文等掲載

相模女子大学 武部正明（統括コーディネーター）

1. 学会発表

2025年度は、学会での自主シンポジウムを2つと招待シンポジウムを1つ、文部科学省共催イベントでのシンポジウムを1つ、神奈川県庁主催のシンポジウムを1つ、とリサーチメンバーを中心に多くの発表を行ってきた。社会や障害のある若者、大学生などを初め、教育・福祉機関、行政機関等を含めて社会に発信する貴重な機会となった。

1. 第33回日本LD学会自主シンポジウム：2025年10月19日（日）

「大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発・その4：当事者主体で開発・活動する意義について考える」

企画者：武部正明 1、司会者：日戸由刈 1

話題提供者：日戸由刈、武部正明、今藤孝拓 2、岩本健吾 2、後藤成海 3

指定討論者：津田英二 4、別田果菜子 5

（1. 相模女子大学人間社会学部、2. インクルーシブ生涯学習プログラム開発協力者、3. 相模原市発達障害支援センター、4. 神戸大学国際人間科学部、5. 文部科学省障害者学習支援推進室）

【内容】

相模女子大学で2021年度から相模原市と連携して、地域の特別支援学校高等部等を卒業した知的・発達障害者を主な対象とした、学校卒業後の生涯学習プログラムの開発に取り組み、現在では障害のある当事者や大学生が運営の一端を担う、企画について意見を述べる、さらには本プログラムの意義を全国の若者や大学等に向けて発信するなど当事者主体へとフェイズが移行している状況を報告した。このシンポジウムでは、当事者主体の活動を方向づける概念として「インクルーシブ・リサーチ」をあらためて取り上げ、指定討論の津田氏からは「インクルーシブ・リサーチ」の考え方及び本実践の意義についてお話をいただいた。

当事者主体であるということは、他者との共同的な学習プロセスを不可欠としており、自己と他者の「当たり前」を省察する必要がある、特に「健常者中心社会の当たり前」という点に異なる価値観を提示していくことができるかどうかのポイントであるとの指摘をいただいた。現在、リサーチ活動はセミナーの運営やリーフレット作成の活動を体験・担いながら活動のふり返りや話し合いを行っているが、今後は当事者の考えや価値観をより話し合う必要があると考える。これまでの活動や体験の積み重ねによりそうしたことが可能なフェイズに来ている。また、指定討論の別田氏からは「知的障害者に対する大学での生涯学習プログラムの展開」は国内では神戸大学と本学が中心であるとのこと報告をいただき、今後地域と連携して、引き続き大学としての運営体制の構築が期待される旨のコメントをいただいた。大学として本プログラムをきちんと位置づけ、地域に発信していくことでインクルーシブな生涯学習の場として整理していく必要があると考えている。

2. 日本発達障害学会第 60 回研究大会自主シンポジウム：2025 年 11 月 1 日（土）

「知的・発達障害の当事者たちが企画・運営・発信するインクルーシブな生涯学習プログラムの開発：その 3」

企画者 武部 正明 1、司会者 日戸 由刈 1

話題提供者 武部 正明 1、宮野 雄太 1、小野 詩菜、加登川 俊太、水野 克隆 2、小松原 裕輔 3

指定討論者 川口 信雄 4、笹森 洋樹 5

（1. 相模女子大学人間社会学部、2. インクルーシブ生涯学習プログラム開発協力者、3. 相模原市発達障害支援センター、4. (株) はまりハ、5. 常葉大学教育学部）

【内容】

本発表では、リサーチ活動に加えて、生涯学習プログラムに位置づけられる「ゼミ活動」の目的や実際内容も発表した。「パーソナル・ポートフォリオ」を作成してゼミ生同士で発表し合うことやお互いの悩みを相談し合う「トリセツ相談会」という実践を報告した。次に、ゼミ活動での経験を経て現在、エンパワメントプログラムに参加する当事者がリサーチ活動について発表した。プログラム開発の発起人の一人である川口氏からは知的障害者にとって特別支援学校卒業後に就労しながら大学で学ぶことや楽しむことの意義はもちろん、大学生や大学の卒業生にとっても意義のある学びであることをお話しされた。同じく指定討論の笹森氏からは「セルフアドボカシー」の視点での意義をお話しいただき、各登壇者にはセミナーの意義、ゼミに参加することでの変化、当事者だけでなく学生にとっての意義などについて問いかけをいただき、3名の当事者を中心に回答するというセッションを行うことができた。当事者が問いかけに自分の考え、ことばで話すことを学会参加者に知ってもらう貴重な機会とすることができた。



第 33 回日本 LD 学会



日本発達障害学会第 60 回研究大会

3. 「超福祉の学校」シンポジウム

「超福祉の学校」とは、障害の有無にかかわらず共に学び生きる共生社会の実現を目指し、NPO 法人ピープルデザイン研究所と文部科学省の共催で、2018 年より実施しているフォーラムイベントである（「超福祉の学校」サイトより）。今年度さまざまなシンポジウムの中で「就労×余暇～仕事も遊びも、そして学びも全部大切！～」というテーマで発表を行った。

シンポジウムの主旨（日戸）、プログラム概要と目的（武部）、当事者と学生が共に学び・楽しむ活動内容と活動の動機、活動の結果（今藤、岩本、下村）が発表した。また、知的・発達障害者の余暇活動の意義、そして東京学芸大学附属特別支援学校卒業生が展開する「若竹ミュージカル」についてお話しいただいた（藤野博氏）。以下 URL 及び QR コードからオンデマンド視聴が可能である。



(<https://peopledesign.or.jp/school/symposium/2948/>)

4. その他

2025 年度は、上記以外に、「総合リハビリテーション研究大会」（2025 年 12 月 21 日）での招待シンポジウムにてリサーチ活動について、「神奈川県庁共生社会実践セミナー」（2025 年 12 月 14 日）にて「さがっば当事者研究会」の実践発表を行った。

(<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/kyousei-forum.html>)

2. 論文発表・ポスター発表（2025 年度分、2025 年 12 月末時点）

1. 日戸由刈（2025）：ステップアップ講座：自己理解とセルフアドボカシー，LD ADHD & ASD，23 巻 3 号，60-63.

2. Takebe & Nitto（2025）：Developing inclusive lifelong learning Program by young adults with autism/Intellectual disability and typically developing university students. Autism Europe International Congress 2025（Dublin）.

(https://www.sagami-wu.ac.jp/media/activity-report_20250912.pdf を参照)

おわりに

おわりに

相模女子大学副学長 中村真理

インクルーシブ・プログラム開発事業は、相模原市が文部科学省より委託を受けた「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」として、相模女子大学と相模原市が連携しながら展開してきたものである。2025年度より「SAGAPPA（さがっぱ）」の愛称を用い、大学を拠点としたインクルーシブな生涯学習の場として、その理念と実践を一層明確にした。

文部科学省の報告によれば、全国の委託大学の中でも、知的・発達障害のある若者を主たる対象として、学校卒業後の生涯学習を継続的に実施している大学は、神戸大学と本学のみであるとされている。本学の取組は、単なる講座提供にとどまらず、障害当事者、学生、卒業生が講義後のグループワークや「私の趣味自慢タイム」を通じてフラットな関係性のもとで学びと交流を深め、さらに当事者自身が運営や進行に主体的に関わる仕組みを備えている点に大きな特長がある。この点が高く評価され、2025年11月には文部科学省企画のシンポジウムにおいて、本学の取組が代表的事例として大きく取り上げられた。

今年度の成果として特筆すべきは、セミナー・ゼミ活動への参加者が、障害当事者、学生、卒業生のいずれにおいても増加したことである。とりわけ卒業生の参加が増え始めたことは、本プログラムが障害当事者のみならず、本学卒業生にとっても「働きながら学び、同世代とつながり続ける」ための重要な場となっていることを示している。出産や子育てといったライフステージの変化の中で孤独を感じやすい卒業生が、本プログラムへの参加を通じて力を得ているという声は、生涯学習が幅広い世代にとって不可欠であることを象徴している。

また、エンパワメント・プログラムやインクルーシブ・リサーチを通じて、障害当事者が企画・運営・発信の中心的役割を担う姿が定着しつつある。学会や行政主催のシンポジウムにおける発表、マスコミでの紹介は、当事者の自己理解やセルフアドボカシーの向上に寄与するとともに、大学における生涯学習の新たな可能性を社会に示す機会となった。

今年度から、人間社会学部・人間心理学科と学芸学部・子ども教育学科のコラボレーションにより、学科横断プログラムに「こどもとこころ 発達支援プログラム」が導入された。これは、学生が学科を横断して学ぶことで、就職に向けた幅広い知識と実践力を身につけることを目的とした副専攻制度で、登録した学生の多くがオープン・セミナーやゼミ活動に参加している。

一方で、参加者の増加やニーズの多様化に伴い、運営体制の持続可能性、専門機関との連携、効果の計画的検証といった課題も明らかになっている。今後は、国の施策動向とも連動しながら、実践と研究を往還させ、大学・地域・行政が協働するモデルとして、より安定的で開かれた生涯学習の場へと発展させていくことが期待される。

本プログラムは完成されたモデルではなく、関わる一人ひとりの経験と声によって更新され続ける「共につくる学びの場」である。2025年度に得られた成果を礎として、今後も誰もが学び続けられるインクルーシブな社会の実現に向け、着実に歩みを進めていきたい。

おわりに

相模原市こども・若者未来局長 伊藤秀俊

日頃より、本市の発達障がい支援に御理解と御協力を賜り、感謝申し上げます。

学ぶこと、人や社会とつながることは、誰にとっても人生を豊かにするための大切な営みです。障がいの有無にかかわらず、すべての人が安心して学んだり交流したりする機会を作ることは、共生社会の実現に向けた重要な課題です。本市では、「相模原市総合計画推進プログラム」、「第2期 共にささえあい生きる社会 さがみはら障害者プラン」を策定し、障がいのある方の生涯学習機会の充実、自立や社会参加の促進を図る取組を進めているところです。

こうした取組の一つとして、令和3年度から文部科学省より委託を受け、相模女子大学との連携・協働のもと、インクルーシブ・プログラムの開発を行ってまいりました。本事業では、障がいのある若者や学生が当事者になり、支援者と共に考え、話し合い、やりたいことや必要な支援を自ら発信するという、「当事者の主体性を尊重する活動」の一つのモデルを提示しました。また、啓発講座等による広報活動、各種学会等での報告を通じて、広く社会に向けて、障がいのある若者の生涯学習や余暇の大切さについて発信してまいりました。事業開始から5年目を迎え、障がいのある方の学校卒業後の学びや交流の機会を創出する試みとして、一定の成果を得ているものと認識しております。

文部科学省が毎年行っている学校基本調査によると、義務教育課程の特別支援学級（知的障害、自閉症・情緒障害）に通う児童生徒数は、年々増加の一途をたどり、直近5年間では約2倍になっております。今後より多くの発達障がい・知的障がいのある若者が社会参加していくという状況にあって、そうした若者の学校卒業後の学びや交流の機会を創出する、本事業のような取組は、ますます重要性を増していくものと考えております。

今後も教育や福祉分野など、障がいのある方の生涯学習機会の拡充に取り組む多様な主体の皆さまと連携・協働しながら、誰もが、障がいの有無にかかわらず、共に学び、生きる共生社会の実現に向けて取り組んでまいります。引き続き、皆さまの御理解と御協力をお願い申し上げます。

結びに、本事業の実施にあたり御尽力をいただきました相模女子大学の皆さま、プログラム開発協力者の皆さま、関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

令和 7 年度（2025 年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究
障害者の移行期の学びのモデル構築

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—

2026 年 1 月発行

相模原市発達障害支援センター

〒252-0226 神奈川県相模原市中央区陽光台 3-19-2 TEL 042-756-8411

相模女子大学

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2 丁目 1 番 1 号 TEL 042-742-1411（代）